

茨城女子短期大学紀要

第 43 集 (2016 年)

<目 次>

1. 筑波山陰の詩人・鈴木正雄研究
..... 小野 孝尚 1
2. ある医師の手記と中山義秀「テニヤンの末日」
～真実と文学作品の間～
..... 小林 和子 21
3. 子ども虐待の境界線を探る
— 保育士を目指す大学生と一般大学生のピネット調査による試み —
..... 安藤みゆき (1)
4. 若い世代への伝言 2 ——震災ボランティアを通して
..... 埴 雅文 (11)

茨 城 女 子 短 期 大 学

43	茨女短大紀	No. 43 P1 ～ 54	茨 城 2016
----	-------	----------------	----------

【研究ノート】

筑波山陰の詩人・鈴木正雄研究

はじめに

本稿の「I、詩集『無蓋車』の成立まで」は、旧著『詩人・大関五郎―詩の光芒と追想』（平成十五年十一月二十四日 私家版）に掲載したものを増補したものです。本書は、茨城県立リハビリテーションセンターで印刷・製本していただき、発行部数も百部と限られたものでした。

真壁町（現在は、茨城県桜川市真壁町）は荒井星花や泉浩郎をはじめとして多くの詩人達ゆかりの地で、室生犀星の詩には、「山間の旅舎」「筑波山の山ふところ」があり、これらの詩は真壁で創られたもので、他にも「結城」について等、犀星の『故郷図絵集』（昭和二年六月）に掲載されている。

泉宅には犀星の短冊が残されており、その短冊には「はたみ交わさぬ君なれどところへだてて祈り合う五月はわれの祈り月」とある。この短冊には裏にも「したたりやまぬ日の光うつとりまはるみずくるま」と書かれている。表の歌は福田正夫が真壁町の伝正寺で脱稿したと後記に書いている長編叙事詩の『筑波の白百合』（大正十四年）に登場する「詩人泉」の心を歌ったものであろうか。裏の「みずくるま」は、当時の真壁町には、水車が多くあった。

小野孝尚

真壁町を訪れた詩人には白鳥省吾、多田不二、萩原朔太郎、佐藤惣之助、福士幸次郎、福田正夫、野口雨情、大藤治郎、萩原恭次郎、大関五郎、本沢浩二郎、能村潔等が挙げられ、百田宗治も来訪し「真壁を思ふ」といつも冬を連想する」と書いている。

その頃の真壁の若い詩人達には山口義孝、山口斌、千徳岩雄等があり、大関五郎にその才能を認められた詩人に鈴木正雄がいる。鈴木木の過ごした青春時代は大正末期から昭和にかけての平和も繁栄もない暗い時代であった。大正十二年九月一日の関東大震災の余波が社会情勢にまで及ぼし、大震災のもたらした混乱や経済危機はその日暮らしの絶望感となつて悲惨な事件を巻き起こした。すなわち九月四日には労働運動家平沢計七・河合義虎が軍隊に殺害された亀戸事件が発生。同じく十六日には憲兵大尉甘粕正彦が無政府主義者の大杉栄とその内妻と伊藤野枝を東京の憲兵隊に連行して殺害した甘粕事件があり、感受性の強い若者達は社会の矛盾に対して敏感に反応した。そして当時は労働運動や社会運動も盛んになってきていた。このような社会情勢の中で若者達の間で議論されていたことは、大正デモクラシーであった。世相を反映して若者達の弁論会が岩瀬や下館や下妻で行われていた。年に一度各市町村の代表が集まって開かれる弁論大会に鈴木は十九歳の時に選ばれた。その様子を

「十代の思い出」(『いはらき新聞』昭和四十八年五月二十四日 真壁石材団地商工協組理事長 鈴木政雄)の中で「樺穂村(現在は真壁町)の選手として選ばれ、現在の下妻一高講堂で開かれた弁論会にのぞみました。私は石屋の手伝いをしながら夜学の補習をうけていました(中略)演説中いなか警察官に「弁士注意」とたしなめられたが、これを横目でにらみながら話を進めました。いまでは考えられないことだが、当時の集会や弁論会などは常に警官立会いで行われたもので「労働」という言葉を使っただけで危険思想の持ち主と決められてしまう時代だった。」と回想している。全くそのような時代であったが、鈴木は、これらの緒問題の根本的な所は、より純粋な人間性のモラルの問題として受け止めようとした。

筑波山陰の高原的な豊かな自然と歴史的なたたずまいを見せる古い家並みと石の芸術とロマンの街にヨネ・ノグチ(野口米次郎)や伊藤整の作品に自己の内的なものを求めて生きた若き日の山の詩人鈴木正雄の軌跡を辿って行きたい。

I、詩集『無蓋車』の成立まで

山へ登る

朝早く山へ登つて行く

日光浅間の連山が

うす明りのなかに君臨する

灯を失った田舎街が

朝霧のなかにまどろんでゐる

太陽は先ず最初の光を

どの邊へ落とすのかと

上へ上へと登つて行く

山の頂へ登つた頃

彼方の山へ光が射した

しかしこの山も光で一つばいだ

どちらが眞の最初であるか

私の足は疲れを知らない。

(『石と竹』昭和四年五月号)

鈴木正雄の本名は政雄で明治三十八(一九〇五)年十二月三十一日に静岡県遠州掛塚町(現在の磐田郡竜平町)に父勘蔵、母タノの長男として生まれた。父は仏石を製造し、仕事の関係で浜松、東京、そして樺穂村今井(現在の真壁町今井)に越した。母の生家は材木商であつて、タノには文化的な素養があつた。正雄の幼児期は祖父母育ちであつた。

大正五年四月正雄は掛塚の小学校尋常科を終え、樺穂村の小学校高等科に入学したが、言葉の違ひを馬鹿にされ学校には行かなくなつてしまった。

大正八年大関五郎が『常総新聞』『彗星』選者となり、正雄は父親と共に石材業に従事しながら詩作を始めた。

山の上から

私は三ヶ月も詩を書かない

朝家を出る時はいつも紙と鉛筆を持って行く

紙や筆を持つにはあまり腕が太すぎる

太い腕でツルハシをふる

朝早くから山を掘って

山の上で一日詩を考える

私には詩はないのか――

このはちきれる世界に詩がない筈はない

両腕に力のこぶをよせ

ツルハシをふる手に鉛筆はあまり細すぎる

私には詩はないのか――

ツルハシの手を休めて

山の上から「オーイ」と一声呼びかける。

真壁石材の歴史は明治の初めに始まり、常陸三山といわれる筑波山・加波山・足尾山から掘り起こされた。大正七年には筑波鉄道が開通し、樺穂地区にも駅が開かれ積み出しにも便利になり作業所や集積所が増えていった。真壁の花崗岩は通称は「こみかげ石」といわれ、石質は緻密で風化力や吸水性が少なく耐熱や耐圧性に優れている。又研磨後の石は美しい光沢があり、墓碑用材や建築用材等に適している。近年には良質の石材と洗練された技術から生み出された灯籠は全国第一である。

正雄は、大正十四年九月『常総新聞』に「ゆく夏」を投稿発表し、大関に認められた。一方茨城県内の詩人たちとは進んで交友を求め、特に真壁の詩人たちの荒井星花、泉浩郎、山口義孝、山口斌、千徳岩雄等と交友を深めた。

横瀬夜雨には大関五郎の師でもあるということ、二、三度横根を訪ね直接に指導を受けた。大正十五年六月の『日本詩人』の新人号に正雄の「山」が掲載され、同じ紙面に夜雨の義弟小森盛の詩も載った。

山

この巨大なる生きもの背中は

とつこつとして、涼しく

不思議にチャーミングである

この生きものは神代ながらのものであるから

こけむして、ぶあつであつて

雄大で神秘的で

かぎりない威厳があるから

風景は平伏して、素朴であつて

せ、せこましい世紀は

何の権威もないのである。

早速に当時江川小学校に勤めていた小森盛から葉書が届いた。

『日本詩人』六月号新人集中のあなたの「山」は拝見して感心しま

した。茨城の人だとは初めは思っていないでした。あれには多くの短詩三篇のつてゐましたが、御らん下さいましたか。

八月号にも多分のものでせうし、『詩神』八月号の全日本詩人集にも推薦されました。ぼくは横瀬夜雨に嫁いでゐる多喜の弟です。ぼくの名は或はおしりかもしれません。でも常総には少しもかゝぬです。どんぐりのせいくらべは感心しません。あなたが大局に目をつけられることはよろこばしいです。雑誌『山』おだしの由、一部恵送下さいませんか。

小森は明治三十九年那珂郡山方村（現在山方町）に生まれ、十九歳の頃から詩作を始め、『茨城文芸』に加わった。その後アーキスト系の詩人たちとの交友があった。小森盛の詳しくについては、本学紀要第四十二集を参照。

葉書によると、夜雨から話を聞いたものであらうと推測される。鈴木は夜雨宅で個人雑誌を刊行すること等を相談したものであらう。もう一通前便に同じく月日が不明の鈴木宛の葉書がある。

明日江川の小学校へかへります。九月号の『詩神』に中堅詩人と一緒に「蜘蛛の巣」を発表しました。また『詩歌時代』には破格のバツテキで悟堂や犀星と同格で牧歌的風景三篇がとられました。『文章クラブ』九月号の広告を見て下さればよく解ります。『日本詩人』へも多分、茨城詩壇近況がのつたでせう。或いは新人集へも、とにかく華々しい出発を欣んでゐます。草々

住所は大宝にてある。内容から前便に同じ年で夏休みも終わりの頃であらう。近況と温かい励ましの葉書であつた。

鈴木の個人雑誌『山』の創刊号は大正十五年六月十五日に茨城県真壁郡樺穂村（現在は真壁町）の自宅から刊行されたのであるが、その前に佐藤惣之助に相談している。

お答へ

個人誌もよし、されどあまりに費用が無駄なり。四五人あつまりて同人誌にする方よからん。

真壁の泉浩郎君等と共に、茨城詩壇のために努められたし。

又希望によりては詩の家に来られるもよし。

君の詩を拝見すると同人として迎えてもよい資格が感じられます。四月四日と封筒の裏に書かれているので、明らかに詩誌刊行前に相談したものであらう。答えは正答であつたろう。しかし、ここは若さで振り切つて実行したものと思われる。

創刊号には『日本詩人』の新人号に掲載された「山」の詩も掲載しているが、少し手が加えられている。

山

この巨大なる生きものは
とつこつとして

不思議にチャーミングである

この生きものは神代ながらのものであるから

こけむしてぶあつであつて

この神秘的な膨大さには

かぎりない威厳があるから

風景は平伏して素朴であつて柔和であつて

せ、せこましい世紀は何の権威もないのである

繪に書いた地震。

雑誌の巻頭詩に「古風な街」を掲げその他自作四編が収められている。

後記の「きれぎれの言葉」の中に暮鳥の詩碑について「なんということをしてくれるのだ、その発起人に詩話会員を初めとして、現詩壇の中堅大家二十余人を網羅しておきながら、畳一枚の天然石とは何事だ。とは云へプロの詩壇人のことだ。俺もこの薄いものを出す為に苦しむでしまつた。」とある。表紙の絵は盟友千徳岩雄が描いた。千徳岩雄は真壁に住み、詩誌『火葬場』に寄っていた。鈴木は個人雑誌を長く続けることと、自分としても行く所までいくといった覚悟があつたようである。

荒井星花は葉書（大正十五年七月五日）に、謹貴誌をありがたうぞんじました。

そのうちにお目にかゝれたら心をひろげ合ひたいとおもつてゐます。

先、取敢お礼まで申し上げました。

なんとか筆をとつてみるつもりであります。

七月七日

二伸 明日は旅にです。 星花生

とある。星花の温かさが感じられる内容である。寄稿を依頼したものであろう。

『山』二号は大正十五年八月一日に発行された。巻頭に「豊満」その

他九編。後記にかえての「宣言」では次の様に書いている。

（前略）

道にはぐれても懸念はしない

私は少しも寂しくはない

未来と光の他何も見えない

私の帆には薫風が充満である

私の磁石には自信がある

暗礁の予告はなにものでもあり得ない

真の自己であるならそれでいい

行程の成否は打算外である

真の自己であるならそれでいい。

出世のことや形式に囚われたり、規約に縛られたものでは無く何よりも自由であることと潔白であることを理念として掲げている。雑誌恵送のお礼の荒井星花の葉書（大正十五年八月一日）には、

貴誌をありがたうぞんじます。

儘々御精のほどを嬉しくおもつてゐます。

いつかおめにかゝれるでせう。

先、取敢お礼まで申し上げました。

とあり、やはり温かい励ましの内容である。『山』三号は大正十五年十月一日に刊行された。「石の聲」（訂正稿）他六編が収録されている。「山頂」を引こう。

山頂

私は山頂の石に生をうけた

私は石の上で生長した

私の感情は山頂の嵐より渡来した

私の思想は風が一番よく知つてゐる

私の心は石が最も共鳴した

私の窓は天涯

私は聖人で放浪者で

私の視界をさへぎるものはなにもものもない

この山頂に風が生れ、光は誕生する

ここで私の友人は戀人は

石と木と小鳥と風で

木と小鳥と話してゐる

ここで私の見たものは

それはこつそりと日が暮れて

山脈の頂に光る雲と

山峡の水車の煙りの

ほそぼそとのぼる風景

その夕ばへの中を

風は悠々と吹てゐた

その風は私の思想を最もよく知つてゐる

石はそれ等を聖人の様に展望した

その石は私の心に最も共鳴した

私の窓は天涯である

私の視線をさへぎるものは何ものもない

この山は私のものである。

初期の作品としては素直によく書かれている作品であろう。山頂からの風景と、心の中の思いをさらりとスケッチしている。この号には石に関する題名は「石の聲」「石と木」「石のみち」があげられるように石にこだわった作品が多い。自分の仕事を強く意識したものであると思われる。

自然崇拜というか、自然の中にあつて自然を対象とし、その中に美しさを見出していく姿勢がある。この頃から野口米次郎の影響が現れてくるが、このことは後に述べたい。後記の受贈誌欄に詩作品に対して「涙の境を脱してゐる」とか「詩は涙ではない」ことを特に強調している。この号を以て雑誌『山』は終刊となった。

『山』の表紙の版画を描いた千徳岩雄の葉書（大正十五年十一月二十四日小石川の消印）には、

街の顔にふたたびかじりにきました。

山はどうです。深山の詩はどうです。

僕にとつて街はやつばいい。これからくるしくともいい。

こちらで僕の『青瓦斯の街』をつくりましょう。

では御勇健のほどを。

とある。千徳は早くに上京した。

柳橋好雄からの葉書（昭和二年一月二十四日稲田から）

隊からの葉書ありがたし。津田沼は自分もすこしはしつて居ます。稲毛、幕張などは自分らも演習したところで、なんとなく変なところに君があるやうな氣してゐます。千葉や習志野なぞ思ひだされます。昨日も今日もといふやうに底冷えのする寒い風が森の梢にも森の藪柑子のうへにも涼にと吹いてゐます。当分詩は書けますまい。だがデッサンの様な感想めいたものは折にふれ何にかへ書きためておいた方がいいと思ふ。自分などそれをしてなかつたので、今困つてゐることもあります。とりあへず返事まで。御自愛專一に。

とある。
昭和三年五月十六日、中山黒門下の岡本潤の手紙には白山上の知堂製の原稿用紙に、

詩稿とお手紙を頂きながら、いろいろ取紛れゆつくり御返事もできず失礼してゐます。詩も拝見してをります。書くとき長くなりますから、お目に掛けてお話ししたいと思つてゐます。但し僕は批評はうまくできません。又日曜にでもおいで下さい。

先ずは取敢えず。
とある。

この年に竹見竹雄との二人誌『石と竹』を創刊し、約一年間続けた。発行所は神奈川県足柄下郡下中村小竹一七八九純情詩社とあり、同人住所にはいろいろ順として経田新一・北海道小樽市稲穂町四四ノ七加藤幸次郎方、竹見竹雄・純情詩社内、鈴木政雄・千葉県津田沼鉄道部隊第二聯隊第五中隊の三人の名前がある。

弟の鈴木重雄氏によると兄は「石は俺で竹は竹見だ」といつていたということで、竹見は真壁町にも来たことがあるとのことである。創刊号の『石と竹』は八月号となつて八月十日に発行された。巻頭には鈴木「あいつの仕事」他三編と「兵舎より」として雑誌を出すことになつたいきさつについて「入營以来まとまつた發表機關のないので、どこかで自分の勝手なことの云へる雑誌がほしいと思つてゐるところへ、竹見君がより話があつたのだ。」とある。自分たちは雑誌を詩脈としてやるものではないとしている。各自それぞれの主張は主張であつて友情は友情だとしている。

本人は、支那へ戦争にいく筈であつたので、いままでの原稿を整理し、詩作七年を八章にわけたとある。以後各章ごとに発表したいとしている。

九月号は十日に発行された。鈴木は「小さな汽車」他四編を發表した。「兵舎より」には「先月までは初年兵係であつたが、此度は補充兵係を命ぜられた。彼等に親切にしてやらうと思ふ。それはどんなにいいことであるか。二十餘名の若者はどんなことでも元氣よくやつてくれる。」とある。前号でも書いていたが、この雑誌を通しては交友を第一義としたい考である。そして静かに続けて行きたいとある。

十月号は一日に発行された。「盛な望景」他五編を發表した。「兵舎より」では、日曜の度に上京して、古い詩書を集めていた様子が書かれてゐる。「古本は神田の夜店が一番安い（中略）夜店のじいさんは古い詩書をもつとつておいてくれる。」とある。

十一月号は一日に発行された。「忘れもの」他四編を發表した。「兵舎より」によると「今月号には旧作も出します」とあり「秋のひびき」「忘

れもの」は椎の木時代「死以上」他二編は近作。

十二月号は一日に発行された。「若い松」他一編。「随筆・批評号」とある。批評の主なものと次のようである。

杉江重英は鈴木について「現実的かつ直情的」であるとして「小さな汽車」「盛んな望景」をいいものだといっている。

中村漁波林は鈴木について「鈴木君は凝視を捨て、軽い氣持、忙しい氣持、或はよく云つて才能に任せて詩作する傾があるように見受けらる。」九月号の「小さな汽車」について「歸休の汽車を歌つたのだらうと思ふが、矢ッ張り力点としてその説明を要しやしないか、しかしこれはいゝ作である。」とし「村童」「建築列車」もいいものだと思っている。十月号の鈴木詩については「感傷的ではあるが深みが足りない。」と書いている。十一月号の「忘れもの」は素朴でいいとしている。「死以上」を面白いと思つたとある。

松村又一は鈴木好きな作品として九月号の「村童」「建築列車」十一月号の「忘れもの」を挙げている。

「兵舎」よりの中に「人が感情にあふれると言葉などを求めはしない。言葉が人を探し回る。」と書いており、このことを希望していた。後ろに「散文的な詩」として「獲物」「記念品」の二編が収録されている。

岡本潤からの手紙（昭和三年十二月二十六日）に、

先日來おハガキをありがたう存じます。山には雪が美しいでせうね。静かない、生活が忍ばれます。

さて、原稿ですが、昨今いろ／＼多忙を極めてゐますので、もう四五日お待ち下さい。生活のためのイヤな仕事で疲れてゐます。山の

雪が見たいと思います。ではいづれ一とある。

柳橋好雄かのら葉書（昭和三年十二月二十九日稲田駅前）に、

雑誌石と竹たびたび戴てゐたりおたよりたびたびいただいてゐたりしても返事ひとつ書けずにゐました。なんともおちつけない貧乏に追ひまくられどうしの生活ほとほと弱り、今はまさゑの実家に世間體は立派に住居してゐます。電話もここに移し、いやな生活を続け生きてゐます。石と竹のカット承知いたしてをります。二ヶ年長い間だつたでしやう。まだ朝夕起床消灯どきにらつぱの響がどこかにあつて君もおちつかないでしやう。御自愛下さい。

このごろの霜夜の月のいいこと遍く屋根々々の眠れをる眠して。稲田駅を新道まつすぐに県道に出る突当一橋本方です。御遊びにどうぞとある。

昭和四年の『石と竹』新年号は一月一日に発行された。百田宗治「神奈川下中村にて」大関五郎「あき」「夜更け」杉江重英「焚火」「垣根」等があり、鈴木は「忘れた竹林」「無蓋車」他三編を発表している。大関は「詩人三人」と題して「鈴木君とは郷里が同じ関係から、その作品には前から親しみを持つてゐたし、逢つてもゐた。鈴木君は實にぶつきら棒な男である。たとへば石、それも路傍にごろごろと里芋のやうにころがつてゐるのではなく、ダイナマイト一發位ではビクリともしない山の巨石を思はせる男である。」とある。

随文欄には「山へ歸る」を掲載し、写真も掲げている。この写真は後に処女詩集『無蓋車』の中扉に掲載されている。編集後記によると、鈴

本は十二月七日に除隊したとある。蔵書の百田宗治『偶成詩集』の献辞に「除隊の記念に」と百田の署名が入っている。二年間の軍隊生活であった。

二月号は一日に発行された。「陶器製風景」他六編を発表。「筑波の裏山より」では「筑波山は何の希もない山だが、いつもあきない山だ。」そして帰郷後は毎日山のなかで暮らしていると書いている。又、寡作であるとも書いている。編集後記で竹見は民謡集を出すことにしたとある。

三月号は一日に発行された。「春の射壇」他二編

四月号は一日に発行された。「筑波の裏山より」に「室生氏の詩のなかに『筑波の山里より仙人掌をしつかりかかえて東京へ歸る』と云う詩があつた『筑波の山里』とは真壁のことではないかと思ふ。真壁は詩壇の或る人々には少し知られたことのある街だ。百田氏は『真壁を思う』いつも冬を連想する『そうだ。この街にはもと、荒井星花、泉浩郎、山口義孝、山口斌、千徳岩雄が居た。しかし比頃は新しい詩を話す一人の友も居ない。』と真壁の詩壇を回想している。山口二人は兄弟。父親が警察官であつたので茨城県内の小学校を五回転校した。関係した所は日立、小川、取手、下館、真壁等である。斌の詩集『老いたる愛の詩』(昭和二十四年五月初版、再版昭和四十五年七月一日発行)の序文は百田宗治が「私が『椎の木』を創刊したのはたしか大正十五年の秋のことであつたと思う。その第一号に山口斌(今は今井鴻象)が赤とんぼの詩を書いていたのを私はよくおぼえている。山口斌は茨城の産でそのころ真壁の町に住んで居り、一、二度その筑波の向こうの町へでかけたこともある。後略」と書いている。この号には能村潔、岡本潤、中村漁波林

等も寄稿している。鈴木は山の詩他六編を発表。裏表紙には竹見の民謡集『新開田』の広告。

五月号は一日に発行。「記念写真」他五編「筑波の裏山より」に山陰の日向は暖かく、山の中では猪の様に働いていることを書き「午后は、野口氏の『日本詩歌論』を読むこの本は山の上の石切場で讀むには最もふさわしい本だ曰く「無表現で表現せよ」と、十四年前にこの言葉(詩論)があつたのだ。一氣に讀でしうと夕方になった。もう、空だけがうす明るい。」とある。

六月号は一日に発行された。「山を掘る七編」「筑波の裏山より」には「春」を発表し、その後ろに「歌の聲」と題して野口米次郎氏作として掲載されている。

七月号は一日に発行された。「山の上の一軒家」を発表。「筑波の裏山より」には「詩集『旗色』について」と題して詩友川島與八郎の詩集の批評を書いている。

八月号は一日に発行された。一周年記念号となっている。杉江重英が「亀」「無題」小野十三郎が「やくそく」大関五郎が「あかぎ」を寄稿している。鈴木は「山の上から」他一編を発表。「筑波の裏山より」に「真の意味で自分の勝手に徹したなれば、それが真剣でないことはない。」とある。裏表紙の竹見の民謡集『新開田』の広告には、好評、初版売り切れ、再版近刊とある。

九月号は二十日に発行された。「新開田お祭號」とある。竹見の寄贈本の批評の返事を収録したものが中心となっている。鈴木の詩は「春の山六編」である。最後に竹見が「一時これで休刊することにする。貧乏

世帯には限りがある。(中略)或このまま廢刊かも知れない」とも書いている。

鈴木正雄の処女詩集『無蓋車』は昭和五年十一月二十八日に素人社から出版された。序文は岡本潤が寄せている。詩集の構成は、大きく五章に分かれ、初めに「無蓋車」として章建てして、十三編収録されている。次の「春の射壇」には九編「陶器製風景」には十二編「あいつの仕事」には五編「花崗山の詩」には五編収録されている。全部で合計四十四編が収められている。

後記によるとこの詩集は「一九二七年より一九二九年迄の作を集めました。大部分は雑誌『石と竹』に発表したものです。」とある。すなわち昭和二年の二十二歳の時から昭和四年の二十四歳の時までの作品で成り立っている。軍隊生活のなかでの作品は始めの「無蓋車」の章から次の「春の射壇」の一部の作品までの前半の作品で、日曜日に出かけた東京の様子なども書いている。後半は故郷である筑波の裏山真壁町での作が中心となっている。

この詩集の制作の背景について自ら「投書をした頃の作は大部分棄てました。習志野で初年兵に取り囲まれて書いた詩と、山の中で血と緒土と交換したものを集めました。」と書いている。血と緒土とを交換したもののという表現は鈴木らしい的を得た表現であろう。

「無蓋車」に収録された作品の雑誌「石と竹」の初出について調べてみると次のようである。(題名の下の数字は年月日であり、○印の四篇についてはこの雑誌には発表されていない。)

目次

無蓋車	
盛んな朝	三・九月十日
無蓋車	四・一月一日
盛んな絶景	三・十月一日
汽車	三・九月十日
記念写真	四・五月一日
喚声	三・十月一日
おそろしい夕暮	三・十月一日
死以上	三・十一月一日
兵舎の窓	四・五月一日
悪い夢	三・十一月一日
頭右	三・十月一日
都会の雨	三・十二月一日
つめたい建築	四・五月一日
春の射壇	
山へ帰る	四・一月一日
光る	○
舗道の下	四・三月一日
春の射壇	四・三月一日
記念品	三・十二月一日

春	四・六月一日
おかしな心理	○
獲物	三・十二月一日
山の男	○
陶器製風景	三・十二月一日
若い松	○
五月の歌	○
蜩	四・二月一日
芋を掘る	四・一月一日
陶器製風景	四・二月一日
秋	三・十月一日
朝の光	四・二月一日
村童	三・九月十日
秋のひびき	三・十一月一日
風	四・五月一日
土龍	三・八月十日
忘れもの	三・十一月一日
あいつの仕事	
あいつの仕事	三・八月十日
業績	三・八月十日
空腹	四・五月一日

無題	四・二月一日
射壇の旗	四・二月一日
花崗山の詩	
山の上から	四・八月一日
高原の菱	四・八月一日
山の詩六編	四・四月一日
山を掘る	四・六月一日
山の上の一軒家	四・七月一日
後記	
序文	岡本潤
詩集の中から三編程引こう。	
若い松	
若い松はまつすぐだ	
山一つばいにたちならむで	
曲りくねつたのや氣取つた松は一本もない	
すなおな頭を皆そろへて	
七月の空を突きあげてゐる	

太陽はらんと廻る

山の下のみちを

誰も目を細くして通つて行く。

初出は昭和三年十二月の『石と竹』大きな異同はないが、三行目が「や」で二つの行に分かれている。五行目「ある」及び八行目「行く」の下に「のだ。」が入っている。又五行目までが一連で六行目からが二連となっている。

はじめに作品の主題を述べる。以下比喩表現を用いて空高く伸びていくことを表現している。人々は優しく、微笑み山の下の道を歩いて行く。松を人間に例えているようである。

陶器製風景

青いフィルムのように日が暮れた

このつめたい整列ぶり

そこいらじゆこわばつて

たゝくとパンパン音がする

いまにそこいらの家家の

屋根看板や電線をたゝきながら

月と星が出るのだ。

初出は昭和四年二月の『石と竹』大きな異同はない。四行目「音がす

る」は「音がするのだ」とし、五行目「そこいらの」は無く、最後まで一文として続けている。

比喩表現を用いて、冬の日暮れ時の焼き物の工房に並んだ陶器の冷たさと張り詰めた雰囲気表現し、外の世界に景を転換し、いまに寒い夜を「パンパン」と音をたてて月や星が昇って行くのだ。寒さにこわばった表現が良く現れている。真壁の粘土は、明治時代後期に焼かれた紫山焼きや、その後の甕や壺類、植木鉢、土管等で親しまれ賑わってきたものである。

秋のひゞき

秋は西よりやつてくる

夏雲がかさなつて雷光のする西の彼方

こういふ晩には稲がよく熟する

稲田にとりこまれた村々より

車戸の音、

上棟の木づちの音

または小鳥を射つのか小銃の音

それらほがらかなひゞきは

たんすのなかよりとりだした様な

私の心にひゞいてくる。

初出は昭和四年二月の『石と竹』大きな異同はない。二行目「かさな

つて」以下行分けしている。五行目「車戸の開閉の音」とある。九行目までが一連で、二連として十行目の次に一行「秋はそのひゞきの方よりやつてくるのである。」としている。

季節の移り変わりを視覚ではなく聴覚で感じる所にこの詩の表現の特徴がある。「たんすのなかよりとりだした様な」と大切にしまつて置いたタンスの中から取り出したと比喻表現している。秋の季節はそのひゞきの方から私の心にやつてきてくれる。

全体鈴木は常に自然の中にあつて自然を作品の対象とし、その中に見出だす小さな驚愕の世界の美しさを爽かに表現している。

十一月八日の消印で東京市外和田堀町松ノ木一、二九の岡本潤からの手紙は神楽坂山田製の原稿用紙に書かれている。

お手紙拝受。序文といわれるやうなものを書き慣れず、うまくできずにすみませんでした。それにあんなものを送つて下さつて、非常に心苦しい気がします。お返しするの何だか失禮ですから、頂いておきます。

山はいゝ、でせうね、小生、此頃、文部省の臨時の仕事に通つてゐます。東京は相変わらず雑然としてゐます。山か海を始終あこがれ、毎日散文的な仕事に追われてゐます。

またお目に掛る機会をまつてゐます。御自愛專一に。
早く本になるのを楽しみにしてゐます。とある。

詩集の贈呈者からの御礼の葉書の主なものは、萩原恭次郎は十二月五日前橋の消印で、

詩集ありがたふございました。

昨日全部拝見いたしました。

御健在なられんことを祈ります。

とある。

佐藤惣之助は十二月八日川崎の消印で

著書『無蓋車』お送惠深謝します。ハツラツとした血がかんじられて、よい詩集だと存じました。

いよくお精進を祈ります。

とある。

小野十三郎は十二月十三日渋谷の消印で、

詩集『無蓋車』ありがたう。

貴下の仕事は前々から『石と竹』を通じて小生とはジツコンの間柄。かうしてまとめられたものを拝見して又感慨無きを得ず。良き本をだされたことを心からお祝ひします。機を見て小生の愚感申述べたく思つてゐます。

右とりあへずお礼まで。御健康を祈る。

とある。

詩集の題名となつた無蓋車とは、砂利・鉾石・木材などの雨に濡れてもかまわない積荷を運ぶのに用いられる。広義では大物車、長物車、土運車、車運車、コンテナ車も含まれ、これらは無蓋車から派生した車種である。鈴木正雄自身の「習志野での初年兵に取り囲まれて書いた詩と、山の中で血と緒土と交換したものを集めました。」とPR葉書に書き、推薦者の言葉として「鈴木君が今度詩集『無蓋車』を出した。巨岩の如き意志と、柔和な青年感情と、秋空を切る芒の如き鋭き感覚とをも

ち、そして猪の如き恋をする鈴木君の詩には必ずや貴下の心を衝つものがあると思ふ。」と、大関五郎、岡本潤、勝田香月、金兒農夫雄の名前が並んでいる。

昭和五年十一月二十七日には、本郷白十字堂樓上にて詩集『無蓋車』の出版を祝う会があった。芳名簿によると出席者は、加藤立雄、滝俊一（千徳岩雄）、篠原新八郎、潮田心、山口義孝、山口斌、金兒農夫雄、前田隆であった。

Ⅱ、詩集『壺中の天』について

鈴木政雄の第二詩集の正しくは、『散文詩・サイパン島生還 壺中の天』（昭和六十一年 五月 方英社）であるが、元々発行日は記されていない。本詩集の著者名の政雄は本名を使用している。この詩集の成立背景には、義弟太田敏雄のサイパン島からの生還という大きな出来事があった。義弟は町葬が行われた後にサイパン島から奇蹟的に生還し、その義弟の手記を基にして散文詩的にまとめた作品であった。

現存する義弟太田敏雄の鈴木正雄宛ての袋の中には、手記と一枚の添え書きがある。手記には、『生還』と題されたガリ版刷りB五サイズで二十ページに記録されたものであり、更にその本文には、赤字で訂正等が入り、『サイパン島 生還』（修正分）とあるので、鈴木から太田へ散文詩作成のため再度の推敲等を依頼したものと考えられる。まえがきによると鈴木正雄八十一歳とある。

『サイパン島 生還』（修正分）の初めに「まえがき」があり、昭和

六十年九月とある。次に目次がある。

1、米国へ宣戦布告	×	
2、横須賀海兵団へ応召	○	誰れ
3、新兵教育	×	
4、検閲式	○	誰れ
5、部隊編成	○	いざ
6、輸送船団	○	いざ
7、飛行場設営	○	いざ
8、敵機動部隊来襲	○	実態
9、総攻撃	○	実態 玉砕
10、敗残兵	○	壺中の天 神か仏か くそくらえ うめき 僕は人間
11、収容所生活	○	良心開眼
12、帰還	○	誰れ

本文の上段は、修正分の目次であり、次の×印の符号は、記録本文に赤字で斜線が入っていることを示すもので、削除することを意味する。○印はそのまま本文を活用している意味である。その下段の題名は、散文詩『壺中の天』の題名である。

『壺中の天』の目次は、

誰れ

七ページ

いざ	十三ページ
実態	十九ページ
玉碎	二十五ページ
壺中の天	二十九ページ
神か仏か	三十五ページ
くそくらえ	三十九ページ
うめき	四十三ページ
僕は人間	四十九ページ
良心開眼	五十三ページ

あとがきにかえて 五十九ページ

以上である。義弟太田敏雄は、戦後四十年を経て、漸く戦争体験を記録にまとめたのであったが、その執筆の機縁となったのが、茨城県で開催された「筑波万博」と戦争を知らない人達のために平和の大切さを知ってほしいとして書かれたものであった。まえがきに「今度の戦争敗因は、科学兵器の遅れにあった。（中略）伝統的な大和魂だけでは、近代戦争に於いての勝算はないことを身をもって知らされたのである。」と述べられている。つまり、筑波万博に見られるように、未来の科学は、果てしなく続き、世界を挙げて開発にしのぎを削っている現状から、執筆を思い浮かんだものである。それに戦後生まれの若者達への「自由主義を謳歌する若者の中には、履き違えた自由に走る者のいることは遺憾であるが、これからの日本を担う自覚に思いを寄せる若者に期待をかけると

共に、戦争を知らない人達のため、私が応召以来第一線に於ける赤裸々な体験を記憶を辿り乍ら概略を記述したものである。」とされている。

「壺中天」は、中国の故事にある言葉で、「壺中に天あり」と読み、別世界の意味としている。又、禅語では、「別是一壺天」（別にこれいこの天）と読ませ、壺の中には、天地があり、人の中にもそれぞれの宇宙がある。その宇宙が全体の宇宙と一つになった時、その人は、大きく生まれ変わることが出来る。即ち悟りの境地に達することができるとある。

『壺中の天』の冒頭の「誰れ」を引こう。

「どなたです」うすぐらい玄関に出た姉の顔である。まじまじと僕を見つめた。しかたがない、何年ぶりの姉である。色々話しているうちに弟である事がわかったらしい。僕はすでにサイパン玉碎の公報により（茨城県）真壁町の町葬になっていた男である。よもや生還するとは考えられなかったであろう。

たまたま来ていた甥と墓地に行き、墓標を前後にゆするとらくにぬけた。表に故人太田敏雄の墓とある。これが僕なのだ。

さあ大変だ。これが町内へ知れると町をあげての大騒ぎとなり、義兄は早速近所の人達を呼び盛大に祝福してくれた。

この事が新聞に出ると、出征した息子の親達が生還への期待をかけて遠方から来訪し、戦闘の様子等を聞きに来る者が続いたのであった。

この冒頭部分は、義弟の大田正雄の本文では、最後の部分である「帰還」によるものであるが、この部分を鈴木は、あえて結末展開部分として、初めの冒頭とし、そこから過去を振り返る構成とした。

大田の本文の概要については、先ず「部隊編成」では、サイパン島飛

行場設営が目的で、その警備と輸送の護衛が任務であった。部隊長は、高島大佐、直接の指示は、主計大尉が行っていた。約二百名の陣営を以て組織されていた。

「輸送船団」の本文の中で鈴木は、「我が船には青竹が満載してあった。」と書いているが、この部分は、後の「総攻撃」の「使役徴用者等には二米位の青竹が渡されこれを槍とした。竹のない者はパイヤの木を槍の代用とした。内地出港の際、青竹が満載されているのを見て何に使用するのであろうかと思っていたが、最高幹部は、既にこの時あるを知つての計らいであつたのかと考えた。いわば私達は、出航時に既に国の犠牲者となるべき運命を背負わされていたのであった。」と悔しい思い出として回顧している。

サイパン島に着いた時の感想としては、ブルーの透き通った海、夜空は星の輝きが美しく、湿気は無く、そよ吹く風は誠に心地よい楽園であつた。ここで、飛行場の建設を急ピッチで進めていた。

サイパン島での戦いは、昭和十九年六月十五日から七月九日に行われたアメリカ軍と日本軍のマリアナ諸島のサイパン島に於ける戦闘であつた。この戦いで、日本軍は、全滅した。又、海上では、マリアナ沖海戦が六月十九日から同二十日にかけて行われた。マリアナ諸島はアメリカ軍にとっては、日本本土のほとんどを攻撃圏内に於ける重要な位置にあった。

「総攻撃」の「昭和十九年六月大本営との連絡により、午後十二時を期し艦隊支援の元に総攻撃を開始する旨南郷中将の命令が出た。」もうこれまでと自分の手榴弾で総てを焼き捨てた。この時、沖の方に日本の

艦隊が来たらしく撃ち合う曳光弾があり、「もう大丈夫と小躍りしたが間もなく絶えてしまった。神風に加護も無く、奇蹟も起きず、皆と話し合い皆で建てた鳥居もテントの綱でひきたおしてしまった。総攻撃に当り、三日分の乾パンと弾薬が配られた。靴は音がするのでぬぎ捨て靴下五足分はく、(中略)乾杯をして集結地点のガラバンへ向かった。ところが敵はこれを察知してか途中待ち伏せ、迫撃砲と自動小銃の一斉攻撃に遭遇する。わが方は、九九式単発銃であるため一発撃つ間に敵艦は十発位飛んで来る。死傷者の続出。戦闘意識は旺盛でも対抗する武器は天地の差、如何せん犠牲者は増大するばかり。やがて後退の命令があつて海岸に通じる溪谷へ下りて行つた。この溪谷は他の部隊の将兵や現地民の婦女子で所狭くなつた。その時私は、目前の十米程の処に窪みのあるのを発見、よじ登つた。先口が五、六人いた。夜が明け始めたかと思われる頃敵の一斉射撃が始まり、白煙は霧がかかったように視界を遮つた。ここで初めてニグロのマリン達を眼下に眺め、やがて自分たちに気が付いたが危害を加えようとはしなかった。」

「敗残兵の生活」では、「その後海に面した断崖の中腹にある洞窟に移動したら、驚いたことに何処も彼処も目の届く処死体ばかりであつた。(中略)もはや飢死を待つのみと思ひやつとの思いで海岸に出た。この海岸に来て珍しく二十人位の同一海岸部隊の残党と遭遇。目は窪み体のふらつきは次第にひどくなつてきた。(中略)僕は食わなくてはならないと彷徨を続けている時、気の合つた兵曹と知り合う。広陵地帯一面草が生えている処に潜んでいた時、敵の掃討戦に遭遇し、左右からのローラー作戦で進んできたときはもう終わりと観念した」がその左右の中間

にいて助かった。「私は、総攻撃まではさほど命が惜しいとは思わなかったが、最後の戦闘で生きのびるにつれて、不思議に日増しに生への愛着が強くなるものだと感じるのであった。」

「敗残兵生活」の中での生死を分けた部分について、

① 海に面した断崖の中腹にある洞窟へ移動、機関銃で撃ってくる。食べ物と水が無い。一週間以上も食べていない。気力だけで頑張る続ける。

② 断崖を下り、海岸に出ると敵機が上空を旋回、波が引いた瞬間に現われる岩の上を飛び越えて向こう岸に着くことができた。心臓が止まる思い出あった。

③ 目は窪み、山へ移動。ジャングルに入り勾配になった処で、足を滑らし、仕掛けられた綱の空き缶がランガンと鳴り、敵は射撃を続けて来たが難を逃れることが出来た。

④ 広陵地帯に一面草が生えている処に潜んでいる時に、敵の掃討戦に遭遇、左右からローラー作戦が進んで来た時は、もう終わりと観念した。目とじてじいっとしていると、不思議に故郷に近い西念寺の境内が頭に浮かんだ。目を半目に開くと、何やら高々と喋り左右の元の方に引き返して行った。

⑤ サトウキビ畑に潜んでいる時には、敵の銃弾が飛んできた。身を伏せながら、父の日露戦争時の話を思い起こし、今自分自身が同じことを体験するのであった。

敗残兵の逃避行が実にリアルに描かれている。生への愛着には、敵の目から逃げることで、生きるための食糧の確保であった。

「食料は、あらゆるものを食べてみたが、一番うまいものはグロテスクな蟇蛙とカタツムリで、蟇蛙は自分で料理は出来なかったが、友がやってくれた。水牛の肉であるが、四、五人で足をしばって横倒しにして、日本刀で喉笛を切り、まだ息のある牛に群がりナイフで肉を切りとり、空腹にはうまかった。牛の殺傷を見た敵は、又掃討戦を厳しくして来たので移動した。」その後、島を占領した敵の物資の陸揚げしたものを歩哨の目を盗み略奪した。十人位行くと半数は帰って来なかったが、餓死しても元々と思い、二回略奪に出かけた。略奪が命がけであるだけに、友軍同士間でこの食料の盗難が発生するようになり、目星をつけられて射殺される者が出て来た。服装は、皆ボロボロで手や顔は洗ったことがなく、飲み水はスコールで溜まった上澄みをすくって飲む、誰も同じように腰に食料の缶を下げ、胸のポケットに箸を差していた。靴の底は破れて布でゆわいてる者、ズボンの尻が破れ別布を前掛けの如く後ろへ下げている者。寝るときは地べたにゴロ寝、スコールで濡れてもそのまゝで、まだ内地で見かける乞食の方が勝る生活である。然し目だけは皆異様に輝いていた。虱は取っても取っても後をたたないのには苦労した。ある時足の傷口を蛆が四、五匹這うにまかせている人を見かけたが、恐らくそれを取る気力さえ失ってしまったのであろうとおもわれるのであった。掃討戦の連続と衰弱の為敗残の将兵は次第に少なくなっていた。指揮はなく体の丈夫なものが覇者で、生きていくことが精いっぱいであった。残酷と悲惨が入り混じった光景は地獄絵図のようである。

クッポウ頂にいた時、敵は、日本の童謡モシモシ亀よのレコードをかけて降伏を呼びかけて来た。これを聞いた時は、懐かしさと望郷の思い

で心がしめつけられるようであったが、世間の批判を考えた場合降伏は出来なかった。その後、木船での闇夜の脱出に失敗、食料を求めて、サツマ芋畑に行き、帰ろうとした時突然の銃撃に会い、芋畑に身を伏しているところを捕えられ収容所へ連行された。途中農家で働いていた日本の原住民が近づいて来て、良く頑張りましたねと声をかけてくれた。

「収容所生活」では、驚いたことには、五十人位の将兵が、白日の下に元気で使役していた。体を消毒され着ていた荒布の軍服は焼却し、敵の軍服が支給された。ここで同じ部隊の一人に遭遇。伏し目がちであり、恐らく早く降伏して来たものと思われた。二週間位経過した頃十名位の者が呼び出され移動した。着いた処はハワイ島であった。半月後米国本土へ移動し、最初は、サンフランシスコ近くの島で検疫を受け、船で有名な金門橋の下を通り、ペンシルバニア州のピッツバークへ着く。その後転々した末に内地へ送還されることになって列車に乗った。MPに警護され只管大陸を走り続けるのであるが、原野に時々家があり、鉄路に沿って延々と舗装された道路はさすが大陸アメリカだと感心した。シャトルから輸送船でいよいよ日本へ向かうこととなった。

いよいよ最後の「帰還」では、祖国では私達をどんなふうを迎えるであろうか複雑な気持ちを抱きながら長い航海を経て浦賀に上陸した。

ありし日の 水とう（こびん）にささむ 猫やなぎ

東京は焦土と化した為、田舎の姉を訪ね、対面しても何方ですかの挨拶であった。色々話をした末、声がにているからとやつと分かってもら

えたが、私は戦死の公報により真壁の町葬済になっていたからで、よもや生還する等考えられなかったのである。甥と共に墓地へ行き自分の墓標を抜いた。これが近所に知れるや町をあげての大騒ぎとなり、義兄（鈴木正雄）は、近所の人々を呼び祝福してくれた。このことが新聞に載ると出征した息子の親が遠方から来訪し、戦闘の様子等を聞きに来るものが続いた。

私は自分の体験を振り返り、内地で名誉の戦死と思われている中にも名誉を汚すような行為をして死んでいった者、最後まで祖国愛に燃え続け帰還した者等様々な事が思いかえされ、中には憤りを感じる愚劣な者もいたが、家族のことを思うと悪い実態は葬って信じている良き夢をそのまま思い続けさせてやりたいと思う心境となった。今現在鎌倉に妻と共に平和に暮らし戦いの時は、神社の鳥居を倒した私であったが、これは神の恵みであるとしみじみと思われ、あれから四十年その私の敗戦の模様を記したいと思う。

巻末の俳句の原作は、

ありし日の 水とう（こびん）にささむ 猫やなぎ

であったものに言葉書き「多くの戦死した友よ」が置かれ、

ありし日の 水筒に捧さむ 秋桜

となっている。

巻末の「あとがきにかえて」は鈴木自作詩「饒舌以上」（一九二九秋・作）を掲げている。

出征した兵士の戦場での悲惨な状況を記録した手記に感銘した作者鈴木正雄は、更に又、義弟の太田敏雄に本文を推敲してもらい、その上で

散文詩化しながら、本文を組み立てて平和への大切さを訴えたかつたものと考えられる。

【研究ノート】

ある医師の手記と中山義秀「テニヤンの末日」

（真実と文学作品の間）

小林 和子

一、

平成二十七年は戦後七十年という節目の年であり、テレビなどでも特集が組まれ、天皇皇后両陛下も四月に激戦地バラオを鎮魂のために訪問され、終戦記念日には総理大臣の戦後七十年談話も発表された。

一方、従軍慰安婦問題は韓国との間で長らく大きな障壁となり、解決の兆しはいまだに見えてこない。

高度成長期に育った、いわゆる戦争も戦後も知らない我々世代もそろそろ還暦を迎え、私自身昨年ついに孫を持った。政治的にも熱い青春を送り今なお意気軒昂な団塊世代の、我々は後塵を拝し続けてきたシラケ世代である。そして、親世代から何となく戦争の話を聞いていたとしても、次の世代に戦争のことを全く語ることでできない世代でもある。我々のような世代が戦争について、若い世代に何かを伝えることは可能なのだろうか。日本文学を専門としてきた私であるが、文学作品と真実の手記とどちらが人に深く感銘を与えるのであろうかという根本的な疑問を抱くようになってきた。

そのようなことを考えさせられる一つの出会いがあった。

紀要という場にはふさわしくないかもしれないが、今回はこの場をか

りて、文学の世界では全く知られていない、戦争文学の名作を生むきっかけにもなった、一つの珠玉の文章を紹介する機会としたい。

二、

昨春、広島で女医をしている又従妹から「父がお会いしたいと言ってるので学会で上京する折に、横浜のホテルにきてもらえないだろうか」というメールをもらった。

私は大学一年の夏休みに、高校時代から傾倒していた小林秀雄の講演が聴けるというので、霧島高原で行われる学生合宿に参加し、その帰路、図々しくも長崎にいた父の従妹のおば様の家に二週間ほど転がり込んだのであった。

高名にあたる医師であり、長崎大学の教授であるおじ様、そして東京の教会で知り合って結婚したというおば様はお二人とも敬虔なクリスチャンで、観光気分が抜けない私におば様は高校生の二人娘さんたちと一緒に孤児院へのボランティアに連れて行ってくださった。また、おじ様は「原爆関連の観光地は暗い気持ちになるのもうたください」などと言ってしまった私を穏やかな口調でたしなめ、「辛くてもそれを凝視

するのは戦後の平和な時代に生きている者の義務だよ」と言って、多忙な中、長崎大学の中にある原爆記念館と原爆遺跡である傾いた門を自ら案内してくださった。帰りの特急電車の中で食べるようにと持たせてくれたおば様手作りの心のこもったお弁当は、中学時代に母を亡くしていた私にとって今まで食べたどのお弁当よりもおいしかった。

それ以降、教授でありながら、環境の良くない地域に立つ狭い団地に、四人家族が肩を寄せ合って心をつ一つにして暮らす高潔なご一家の姿は私の理想の家族として長く印象に残った。

しかし、なかなか長崎と関東とは遠く、お目にかかる機会もなく年月が過ぎ、又従妹である二人のお嬢さんが広島と神奈川で医師になつてゐる事などをおば様の年賀状で知ったぐらいであった。たまたま十年ほど前、長崎で学会があった折にお宅へ伺ったが、飛行機の時間の都合もあり、お土産を渡して早々に辞去した。政治家をしていた親戚などが主催する会にも遠方ということで参加されることも少なく、なかなかお会いできないままであった。しかし、数年前に年賀状を例年通り出すとおじ様から返事が来て、おば様が急逝されたことを知った。私は若いころにお世話になり、長く自分にとっての理想のご夫妻だったので、そのことを書き記した手紙を送ると、少々怖いと思っていたおじ様から心のこもった手紙をいただいた。そして、親戚の会で久しぶりに再会し、個人的にもお会いする機会を得たのであった。

お二人が宿泊しているホテルで御馳走になった折であった。その時に、私が日本近代文学が専門であることを知っていたおじ様から「中山義秀の『テニヤンの末日』のもとになった本間博士の文章を知っていま

すか？」と尋ねられた。恥ずかしいことに中山義秀の「テニヤンの末日」もおぼろげにタイトルを知っているだけで読んだことも無く、どのような作品であるかさえ知らなかった。中山義秀の作品自体きちんと読んだこともなく、もちろんそのもととなったという文章など知る由もなかった。

その邂逅の数日後、二宮英温＋図書新聞編『本間日臣の復活リレーエッセイ医学の道』（彩流社、2008・1所収）という本が手紙を添えておじ様から送られてきた。おじ様と本間日臣博士とは東大の第三内科の先輩後輩の間柄だったようでおじ様の心のこもった追悼文もその本の中に入っていた。その本に付箋をつけられた部分があり、それが、本間博士の「玉碎の島テニアンから生き延びて―『サザン・クロス』―」（私家版「大島欣二追悼録」1949年）だった。何気なく読み始めて、涙が止まらなくなっていた。高校一年生の時に「きけ わだつみのこえ」（1949年初版）を読んであまりに辛く悲しくて泣いてしまい読み続けられなかった思い出もあるし、最近も特攻隊員や戦死した若い兵士の遺書や手記に接するたびに辛くて読み続けられないようになってしまいうこともあった。また、高校の教科書にも載っていた大岡昇平「野火」なども読み、証言としての文学の重みも痛感することはあった。しかし、文章を読んでこのような深い感動に浸ったのは久しぶりのことだった。

戦地で亡くなった友人への思いが、抑制のきいた、しかし本当に美しい文章で語られていた。私は何故こんなにもこの文章は読む人を感動させるのであろうかと思い、続けてこれをもとに作られたという戦争文学である中山義秀「テニヤンの末日」も読んだ。しかし、とても良い作品

だとは思ったが、本間博士の時以上の読後の感動は無かった。

三、

ここで、本間日臣氏の手記の歴史を説明しておきたい。

昭和二十二年七月に戦死の確定通知が大島中尉の遺族のもとに届き、親しかった方から追悼録を出したらどうかの提案をもらい、それを親しかった方々に配ったものの中に、本間日臣氏の「玉砕の島テニアンから生き延びて―『サザーン・クロス』―」があった。そしてそれをもとに鎌倉で近所だった作家中山義秀が「テニヤンの末日」として結実させた。

その後、医師の羽倉稜子氏がテニヤン島に旅行する機会に、医学雑誌で呼吸器学の大家である本間日臣先生と谷本晋一先生の対談で、中山義秀の「テニヤンの末日」が本間先生の友人への追悼記がもとになっていると書いてあったのを思い出し、「テニヤンの末日」を読み、このものであるという本間先生の手記をどうしても読んでみたくなり、谷本先生からそれを借りて読んだ。手記に感動した羽倉氏は当時勤務していた朝日生命糖尿病研究所の患者の会の会誌「あさひ」（1994年）への転載を本間先生にお願いし、それが大島欣二氏の令弟秀夫氏の目に留まり、羽倉稜子編「テニアンに捧ぐ鎮魂のうた：二十一世紀への祈りをこめて」（朝日生命糖尿病研究所、1998・12）という小冊子に所収され、医学関係者の中で少しづつ評判となり、若い医学徒であった令息を事故で亡くした二宮英温氏の目に留まり、二宮氏の依頼でそれまでの本間氏の文章を集めた『若い医学徒への伝言』（NPO法人PDN、2001・12）が作られ、そして、私が出会った本、二宮英温＋図書新聞編「本間

日臣の復活リレーエッセイ医学の道」（彩流社、2008）にも再録されたのであった。

その間に現代仮名遣いに換えられているが、加筆修正は全くされていない。

次に、本間日臣博士の「玉砕の島テニアンから生き延びて―『サザーン・クロス』―」の内容を簡単にここで紹介しておきたい。それは基本的には中山義秀「テニヤンの末日」の内容ともほぼ重なる。この手記は次のように始まる。

昭和十年の夏休みであった。一高旅行部は富山から北アルプスに入った。

剣の眺望、八峰キレットの難所。薬師を経て黒部峡谷から祖母谷温泉へ。更に白馬から槍へ。そのコースに沿って今なお鮮やかに浮かんでくる美しい思い出の花が撒かれていった。

青い空があった。白い雲があった。アイゼンで一步一步ふみ超えた雪渓があった。色とりどりのお花畑があった。（中略）

欣二君と私とが親しく接するようになったのはその時が最初だった。

テニヤン島で亡くなった友人・大島欣二氏への追悼録として親しい人たちに配られたものである本間氏の文章は、悲惨なテニヤン島での出来事を語っているにもかかわらず、故人との青春の明るい出会いと、故人へ手向ける美しい山の花々から書き始められている。

アルプスの山と青空を背景にした出会いの時の、この大島欣二君の「涼やかな微笑」は、彼が病氣から快復した時の「アルプスの笑顔」として、そして、彼の死を知った後の最後の回想の「微笑」にまで続いていく。テニアン島での再会と別れは、「到るところに真っ赤な仏桑華が咲いていた」と始まる。

ちなみに、仏桑華とはハイビスカスのこと。テニアン島はマリアナ諸島の中にあり、サイパンのすぐ南に位置する周囲十五マイルの小さな島である。

昭和十九年の二月末、本間氏も大島氏も海軍軍医大尉として前後してテニアンに赴任した。本間氏は飛行機を降りるや否やアメリカ軍の初空襲に遭遇し、数日後にサイパンから来た大島中尉と再会を果たす。「かさかさな灰土のような野蛮じみた前線基地の空気の中で、彼との対話のみは私の心に泉のような懐しい文化の潤いを与えてくれた」と述べ、二人の論議の対象は「柔らかな粘土の時代に、打たれて叩かれて、一つの類型に均一化された人々」が、「人間の生命という切実な問題に否応なしに直面せざる得ない戦地にあって、どういう反応を呈するか」という問題に関してであった。その例証として、数人の軍人たちの姿が描かれていく。内地ではあばれんぼうだったが近頃急に本を読むようになったという、飛行場の組み立て椅子に遮光眼鏡をかけてじっと座っている分隊長は、「今日部下の戦死確認書に捺印した如く、いつか司令が自分の戦死確認書に捺印する事は間違いなかった」。

鍾馗のような頬髯をはやした海兵出の大男の中尉は兵隊たちには怖れられていたが大島軍医には一目置いていた。海上に不時着した搭乗員の

搜索に同行した本間氏は徒勞と知りながら必死で日没まで探し続けるその彼の姿と、海上で級友に出会った彼がお互いに死んだ友の名前を告げあう姿を目撃する。部屋に戻った彼が無造作に羊羹を食べながら「わしもそろそろ年貢の納め時が来とるよ」と笑った時、「彼の瞳の底に私はおよそ彼の外貌と似ても似つかないしつとりと澄んだ秋の哀愁がかすめたのも見逃さなかった」という。彼がペリリューを離陸直後に敵機に襲われて海没したのはその間もなくのことで、「欣二君の部屋の棚の上に彼の名前の書かれた柳行李が長い間残されていた」。

四月に入ると兵隊たちの間でカタル性黄疸患者が増加し、二人は医師としての本来の任務を果たすべく、設備のままならない状態で原因を突き止めようと奔走する。

四月二十五日に病院船氷川丸がサイパンに入り、本間氏は治療品を受け取りにガラパンへ行き、その折に一高時代の友人と出会い、彼は持っていたポール・ヴァレリーの詩集の四頁を裂いて本間氏に呉れたが、それは彼を見た最後の姿だった。

ガラパンの売店の片隅で埃をあびたベートーベンのヴァイオリン協奏曲とモーツァルトのピアノ協奏曲とジュピターを買い、ドビュッシーが好きな欣二君と病院からの帰り道に夜空を見上げると、正面にサザン・クロスがかかっていた。それは地獄の前のひと時の安らぎの光景として本間氏の心に残り、この手記のタイトルにもなったのであろう。

二人は遂にカタル性黄疸が伝染性（注一）のものであることをつきとめるが、大島大尉の上官の軍医長は大島氏の研究をよく思わず妨害したため、指揮系統が違う本間氏が中心になってマリアナ地区の軍医会で研

究発表することになる。その間に突然、大島軍医はけいれん発作をたびたび起こし、大島氏自身は食中毒を疑い「ピカタン」を打つように指示するが、本間氏は精神的なものを疑い処方を変えた。「人一倍旺盛な研究心と正義心に燃えた理性の人欣二君にとって、不合理をもって圧迫されるほど苦しい事はなかったらう」と本間氏は回想する。大島軍医の容体は次第に回復し研究発表の成果を二人で喜び合い、欣二君の撮ってくれた海を見つめる後姿の写真に *heimweh* (郷愁) と書いて内地に飛び立つ飛行機に託した。

しかし、六月に入るとアメリカ軍の空襲は激しさを増し、対岸のサイパンが陥落したことを知ることとなり、追い詰められた状況の中、アルプスで山を見上げていた時と変わらぬ「欣二君の静かな湖水のような眼」だけが本間氏にとっては救いであった。

七月二十日頃、司令部の洞窟で彼に会って数話話したのが最後となった。七月三十日に遂に米軍が上陸してきた。狭い岩壁の隙間に座っていた少佐になったばかりの神経質そうな将校が軍人勅諭を詠み終わると拳銃で自殺したのを看取る。「路傍の死体の中には女子供のものも認められ」、「子供を海に投げ入れて悲痛な吐息をつく母もあり、今や全島は地獄の火の燃え広がった島であった」。翌三十一日ジャングルで欣二君の部隊の兵隊に出会い、彼の消息を聞くと、「戦死されました」との返事をもたらす。「指揮官と共に防空壕で作戦を練ってゐる時に、戦車砲の直撃を受けたというのである」。「無数の死骸と無数の死の中に在って不感性となっていた私の心に彼の死は鐘のような余韻を引いた。彼は微笑んだ。私もじきに行くんだと思う」、「静かな湖面のように澄みきった科学

者の姿勢で濠に寄りかかっている彼が見える気がした」。そして「雪崩のように砲声が近づいてきた」と結ばれる。

四、

次に、医学界では有名な方の方ではあるが、本間日臣博士のことを簡単に紹介しておきたい。(注2)

大正5年(1916年)に父英史、母八重子の長男として出生。日臣が五歳の時に父は満鉄長春病院長となるが、満州事変の年に帰国し東京麹町に開業した。麻布中学、旧制第一高等学校、東京帝国大学医学部を卒業し、軍医学校を経て、海軍軍医としてサイパン島南にある玉砕の島テニアンに赴任する。爆撃に会い気絶していたところをアメリカ兵に助けられ、九死に一生を得て、テキサス・ヒューストンの捕虜収容所を経て、昭和二十一年に帰還。母の影響でクリスチャンとなり、東京の家が空襲で焼失したため鎌倉稲村ヶ崎に居を定め、近隣の文学者、中村光夫、吉田健一、中山義秀の知遇を得て、健康相談にあたる。昭和二十三年、東大第三内科に入局し、冲中教授の媒酌で結婚。翌年、フルブライト奨学生として米国コロンビア大学に留学。昭和三十三年、虎の門病院開院と同時に初代呼吸器科部長となり、室生犀星の主治医として逝去の際の枕頭に待る。昭和四十四年に順天堂大学医学部に日本で初めての独立した内科学講座として呼吸器内科が出来る初代教授となり、非結核性呼吸器病学の日本における啓蒙と発展に尽くし、日本肺癌学会や日本胸部疾患学会会長などを歴任した。

Ciniiの論文検索をすると452件、著者検索で167件の論文が上がっ

てくる。58歳で心筋梗塞、71歳で直腸癌、75歳で腹部大動脈瘤切迫破裂を患うが克服し、生涯臨床医としての人生を貫いた。

先に触れたように、若い医学徒であった子息を交通事故で無くしたジャーナリストの二宮英温氏がたまたま本間氏の「サザン・クロス」の文章に出会い感銘を受け、もう一度活字化することを本間氏に提案し、『若き医学徒への伝言』として2001年末に刊行されたが、翌2002年の11月7日午前、虎の門病院での外来診療中に聴診器を持つたまま倒れ、胸部大動脈瘤破裂によって86歳で亡くなった。臨床医としての見事な最期を全うされ、戦争中の悲惨な体験を胸に秘めて生と死を見つめながら、戦後の医学界の発展に生涯尽くされた。

本間博士は医学の世界では碩学で知られ、その本間氏の戦争体験を記した手記が素晴らしいものであることは周囲の人々の間では評判だったようである。だからこそ何度も発掘されて本に所収され、中山義秀の「テニヤンの末日」のもととなっていることも知られていたようである。

しかし、文学の世界から見ればこのような素晴らしい手記が戦争文学である中山義秀の「テニヤンの末日」に結実していたことも、それ以上に、このように素晴らしい手記が書かれていたこと自体が全く知られていない。

五、

この本間氏の文章をもとに戦争文学の名作「テニヤンの末日」を残した中山義秀についても、ここで簡単に紹介しておきたい。

中山義秀は明治三十三年（1900年）福島県岩瀬郡大屋村（現・白

河市大信）に水車業を営む家の三男として生まれた。本名は謙秀。安積中学（現・県立安積高校）を卒業後早稲田大学予科に進学し横光利一らと出会い、同人誌「塔」を作り処女作「穴」を創作した。大正十二年早稲田大学英文科を卒業後、前年に結婚した妻トシを伴って三重県立津中学校（現・県立津高校）の英語教師として赴任し、当地で長男を得るが二年後退職し、大正十五年千葉県成田山新勝寺の私立成田中学（現・成田高校）の英語教師となり昭和八年まで奉職しこの地で長女も得ている。しかし、友人横光らの活躍を見て文学への夢断ちがたく、妻子を実家に預けて上京、貧窮の中文筆生活を送り、愛妻・トシ死去を経て、昭和十三年「厚物咲」にて第七回芥川賞を受賞した。翌十四年に史伝風作品「碑」を発表し作家の地位を固めていった。昭和十七年に武者小路実篤らと浮名を流した奔放な女流作家・真杉静枝と結婚するが戦後の二十一年に離婚（注3）、昭和十八年六月から十二月末まで海軍臨時報道班員としてジャワ・ボルネオなどの南方諸島を巡歴、帰国後鎌倉市極楽寺に定住した。戦後は鎌倉文庫の創立に参画し、昭和二十二年長女の結婚（注4）後、スミ夫人と再婚した。この年の年末に親友・横光利一が急逝している。昭和二十三年九月「新潮」に「テニヤンの末日」を発表し、翌二十四年一月に小説集『テニヤンの末日』（文芸春秋社）が刊行された。昭和二十五年に三番目の妻スミとの間に次女が誕生し五十歳を迎え、二十年代後半から雑誌「オール読物」に歴史小説を多く書くようになり、二十九年十二月「小説新潮」に始まる一連の「新剣豪伝」シリーズはその後の時代小説の先駆けともなった。昭和三十三年には直木賞の選考委員となり、三十九年に明智光秀を描いた「咲庵」で野間文芸

賞、四十一年には芸術院賞を受けたが、四十四年癌のため六十九歳で亡くなった。昭和四十六年七月から翌年二月まで新潮社から『中山義秀全集九巻』が刊行され、平成五年四月郷里の生家があつた近くに白河市立中山義秀記念文学館が開館し、中山義秀顕彰会主催で歴史小説・時代小説を対象とする中山義秀文学賞が創設され現在に至っている。

全集の中の多くは時代小説であり現代小説は少なく、戦争を扱った作品は「テニヤンの末日」だけである。

立派な記念館や記念した文学賞はあるものの、時代小説作家の宿命として徐々に忘れられていって、日本文学研究の分野ではほとんど扱われない作家であるとも言えよう。

親友・横光利一のような時代の脚光を浴びることも無く、新感覚派やモダニズム、プロレタリア文学とも無縁で、戦後は鎌倉文士の一人として時代小説を沢山残した作家、という評価であろうか。

正直言えば、本間日臣先生の本をお子様から頂くまで名前だけしか知らない作家であつた。中山義秀が教鞭をとった津高校出身である私がある。高校時代もそのような話を聞いたことも無かつた。ただ、成田山公園に行った折に文学碑を見たことがあつたぐらいであつた。

六、

「テニヤンの末日」に関しては、中山義秀自身が南方に戦争中巡歴している事からネット上などでは本人の体験から書かれたように誤解されている場合もあるようであるが、義秀自身は全集所収の「『テニヤンの末日』後記」（注5）の中で次のように書いている。

テニヤンは帝大内科勤務本間日臣氏の友人に対する追悼記を材料にして書いた。本間氏は飢渴のためカリリナス台地下の密林に昏倒してゐたところをアメリカ軍に救はれ、捕虜となつてテキサス州へ赴き、敗戦の翌二十一年に日本へ送還された二人の軍医将校中の一人である。

本間氏の手記にテニヤン引上民の聞書を参考にした。その聞書をつてくれたのは会津の人公家務氏である。公家氏は復員軍人であるため、その聞書は要領をえたものであつた。（中略）僕は戦時中南方を一廻りしてきたが南洋群島を知らない。しかし、熱帯圏を知っている。テニヤンを書くのに役立つた。伝へるのに厄介なのはあの暑さである。それは親しく実験したものでない限り、文字によつても写真によつても伝へられない。熱帯にあつてはどんな悲劇も悲劇感をぼやけさせてしまふ。悲しくとも涙が出ないのだ。暑さのために感情がぼやけてしまふのである。温帯や寒帯だつたら、悲愴感はずっと切実なものだつたに違ひない。

僕はテニヤンを書くのにかんがりの苦勞をはらつたが、事実を曲げはしなかつた。武器もなくしたがつて抵抗らしい抵抗もできずに、むなしく爆弾や砲弾や戦車弾の餌食になつて死んでいった人々の死を、主観でもつて歪めるやうな心にはなれなかつた。「運命の島」（注6）の一読を勧めるのもそのためである。

敗戦に終わつたにしろ大陸や南方やアリューシャンで、我々の同胞がどのやうな悲惨な戦を闘ひ死んでいったかといふことを、如実に知

りたいと思ふのは私達の至情だ。遺族にとつてはなほさらであらうし、後代の人々もおそらく無関心ではありえない。また、無益な戦争のために異域の土と化した霊にたいしても、それ等の報告は一片の回向ともなるであらう。

ここでわかることは、「テニヤンの末日」は、戦地で悲惨な死をとげた多くの人のことを後世に残したい、という気持ちから書かれたものであり、誠実でけれんみの無い中山義秀は、基本的に本間氏の手記を尊重して創作をしていたということである。

それでは本間氏の手記と中山義秀「テニヤンの末日」とを実際に比較してみよう。

分量にすると中山義秀の「テニヤンの末日」は本間日臣氏の手記の二倍強で7章からなっている。

本間氏の手記の大島欣二氏は岡崎大尉、本間氏は浜野大尉と名付けられているが、中山義秀が後記で述べていたように、大筋では手記に比較的忠実に描かれている。エピソードも戦況の推移も島の様子も、本間氏の手記を踏襲している。

違っているとすれば、本間氏の「サザーン・クロス」には女性は登場しないが、「テニヤンの末日」には、小説としての色どりの清子という従軍看護婦が登場する事。また、岡崎の病気の原因を上司である小関軍医長からの圧迫と決めつけて強調している事。

そして、最後追い詰められた司令部が兵隊を置き去りに潜水艦による島外脱出を企てていた事であらう。

本間氏の文章は親友への鎮魂が主であり、戦争の悲惨さや地獄のような体験を強調しようとするような側面は表に立っていない。主観的な判断や思考は殆ど避けられて、淡々と事実が時間を追って書かれている。もちろん、究極的な状況の中で自分を見失ってしまった人間たちの愚かさや醜さも、また悲しみも描かれてはいるが、それは常に静謐である。そして何より印象に残るのは、極限状態の中でも医師として科学者として冷静に自らの職務を遂行しようとする若い二人の姿なのである。

本間氏の学生時代の友人であり、詩人でフランス文学者でもあった宇佐美英治氏（本間氏と前後して亡くなった）は『若い医学徒への伝言』の「序にかえて 郷愁―『サザーン・クロス』頌」の中で次のように述べている。

まず、これは格調高い名文だ。これほど一人の人間の死が崇高に書かれた記録は珍しい。（中略）一人の生命の重たさが全アメリカ軍、全戦争、全世界の狂気と正気に匹敵する。死が日常となっている戦場で、生命はなお稀有のものなのだ。毎日、毎日が稀有なのだ。

第二に私の心をとらえるのは臨床医学者としての優しさと厳しさ、冷静さが、手記に描かれた二人の行動、日常の会話、起居のはしばしに常を感じられることだ。どんな状況下にあっても二人は真理をつきとめようと努力する。全滅の火が目前に迫っているのに大島大尉は瓦斯壕の病兵を見舞おうとする。私の心をとらえるのは、二人の若い科学者の精神の純粹さが、いかなる絶望下にあっても常に生き生きと感じられるからだ。

本間氏は別の論叢の中でわれわれが一高にいたころ共に願ったロマンティック・アイデアリズムのことを語っているが、くりかえし読むうち、私はまさにそれがこの手記の主題になっているのを感じた。

本間氏を若い時からよく知る宇佐美氏の言葉に私のような者が付け加える言葉は見つからない

本間氏がテニアン島に持ってきたたった一冊の本として『京詣歌集』という聞きなれない書名がさりげなく出てくる。矢内原忠雄の著作であることを鑑みると、キリスト教的なロマンティック・アイデアリズムが魂の根底にあることは確かであろうと想像できる。

『若い医学徒への伝言』の中に「追悼記のあと・さき―『サザン・クロス』再録の謝辞に代えて―」という、本間氏がテニアン島へ慰霊の為に訪れた時のことを書いた一文がある。そこには次のようなことが書かれている。

この慰霊行で、一つだけ強烈な印象として現在もお鮮明に脳に浮ぶ情景があります。

(中略)

サイパンを一望する頂に辿りついて一息ついた時、真白なカモメが二羽、どこからともなく頭上に現れ、同じ位置を保ったまま離れようとしなかったことです。紺碧の南洋の空を背景に、陽光を浴びた真白い羽根は透き通るように美しく輝いてこの世のものとも思われず、まさに畏友大島大兄をはじめとする戦友のみたまがわれわれを迎えてい

るに違いないとこのころのたかぶりを禁じえませんでした。

ロマンティック・アイデアリズムとは私には、生涯臨床医として生と死と向き合った本間氏が持ち続けた魂だったのであるうと思われた。

私もカモメになったみたまを信じたい。

ここにこそ、文学を文学たらしめるロマンがある。だからこそ、上手に文学化された小説「テニヤンの末日」以上の感動を、淡々とした記録である本間氏の手記が読む人に与えるのであろう。

そして、この「サザン・クロス」以外では、テニヤンでの体験を決して語らなかった(注7)という本間氏のその真摯な生きざまにも深い感銘を受けるのである。

あまりにも辛い悲惨な経験は軽々しく語ることを憚るのであろう。

戦争文学というものは所詮、戦争を題材にしての文学手法であり、「サザン・クロス」という、ロマンティック・アイデアリズムに裏打ちされた真実の絶唱に匹敵するはずもない。

七、

最後に中山義秀の「テニヤンの末日」の評価についても触れておきたい。

全集の解説を書いた平野謙はこの作品は「作者なりに戦後を許容したすえに生まれた作品」として中山初期の代表作「厚物咲」や「碑」との「主要人物のコントラストという構図」という点に相似を見出し、「慈眼と冷眼とが表裏する作者の眼ざし」(昭和46・9)を指摘している。

男性二人が主人公で一方が回想という形で語るという構図は確かに同じではあるが、『私のような者でも救われるか』そういった悲願を主人公の醜い姿に仮託した（『私の履歴書』）と作者が語っている「厚物咲」や、自らの祖父たちに素材を取って人生の敗残者を描いた歴史小説「碑」とは「テニヤンの末日」は違う。厳しい状況下でも医者として科学者としての冷静さと理想を失わずに助け合う二人の若い軍医の友情は、本間氏の手記に忠実であり、長年の文学者としての屈折が反映した前者二作品とは別個の輝きを持っていると言える。

記念館の展示やカタログにもあるように、吉田精一の「戦後の戦争文学の中では、ヒューマニズムの豊かな、すがすがしいあと味を残す作品」という評価がこの作品の他の戦争文学との差異を端的に表現しているであろう。しかし、松本道介が「中山義秀・人と作品」（『昭和文学全集13』小文学館、昭和64年）で「この作品になにか暖かな肌ざわりを感じるのは」、「主人公が、中山のほとんどの作品に共通する反逆児タイプではなく、素直で冷静なインテリであるからだと思われる。その素直さ、冷静さ、ヒューマニズムは、モデルの性格からくるものでもある」と指摘して、従来この作品を初期の代表作「厚物咲」や「碑」に引きつけて読むことを否定している。

この印象は、もともなった本間氏の「サザン・クロス」に支えられているからだと思う。

そのほかに河盛好藏氏は「テニヤンの末日」は「ヒューマニティーという軸を中心とする現代人の異常な運命の悲劇なのであり、その意味でここに私は義秀氏のパトスを強く感じた作品であった」（『新選現代日本

文学全集6・中山義秀集解説』筑摩書房、昭和35・8）と書いている。また、中山の友人である石塚友二は「新潮現代日本文学15・解説」（昭和56・4）で、「戦争という狂気的な人間悪を背景に、また日本の軍部なるものの醜悪な正体を告発しつつ、結論的には、人類にとつてただ不幸を齎すだけの戦争というものは、絶対に之を否定しなければならぬ、こういった主旨を、回想の形で浜野修介なる主人公が語っている」と述べ、「偶々近くに開業した医者で、こうした体験をして来た人がおり、その人の談話とメモを骨子として書かれた作品である旨を、当時私は中山義秀本人から聞かされた覚えがある」と証言している。「開業」は勘違いとして、中山と本間氏との出会いは鎌倉で近所だったことが縁だったのは確かなのである。

中山義秀の「テニヤンの末日」は、たまたま読んだ本間氏の手記に深く共鳴した結果、戦争をようやく客観的に描けるようになってきた時代背景もあって、「後記」にあるように、戦争というものの不条理を描きたいという欲求から執筆されたものであるのは間違いない。

しかし、南洋体験のあった中山義秀ではあったが、この「テニヤンの末日」はやはり、本間氏の「サザン・クロス」が無ければ書けない小説だったと言えるだろう。ゆえにこそ、中山義秀の唯一の戦争文学となつたのである。

もしかすると中山義秀の時代小説は読まなくなることはあるかもしれないが、手記というリアリズムを土台にした戦争文学「テニヤンの末日」だけは残っていくであろう。

八、

日本の太平洋戦争に関わる戦争文学は戦後たくさん書かれ、その多くは1964年に集英社から刊行された全十六巻からなる『昭和戦争文学全集』に収められ(注8)、この中山義秀の「テニヤンの末日」もその「第5巻 海ゆかば」の巻に入っている。

そして、この全集には吉田満の「戦艦大和ノ最期」(昭和二十一年十二月雑誌「創元」創刊号に掲載予定であったがGHQにより全文削除となり、昭和二十七年八月に創元社から刊行された)も入っている。これは三島由紀夫がどのような戦争文学よりも高く評価した貴重な戦記である。

私が今回、紀要に中山義秀の「テニヤンの末日」を取り上げようと思ったのは、医学界の一部の世界では、本間氏の「サザン・クロス」という文章の素晴らしさは知られていたとはいえ、日本近代文学の世界では全く知られてもいなかった事、その上、その文章が手記に忠実にを motto に書かれた小説家の手になる「テニヤンの末日」以上に鮮烈な感動を与えるものであったからである。

やはり文学作品は、ロマン的魂を持った人によって書かれた真実の記録には勝てないかもしれない。

なんとかこの作品を格調高い珠玉の戦記文学として、一人でも多くの一般の日本人の目に触れさせることはできないか、という切実な思いが残った。

アメリカ軍はサイパンを征圧したのち、グアム、テニアンと次々に襲撃を開始した。テニアンの戦いは1944年7月24日から8月3日まで

続き、第一航空艦隊をはじめ約8,500人の兵士が在島したが、約8,000名が戦死し、生存兵士は313名であった。民間人は15,000名が在島していたが多くの民間人も犠牲になった。

日本が建設し死守しようとしたテニアン島のハゴイ飛行場からは、この玉砕の後、広島、長崎に向けて原爆搭載機が飛び立った。

私は、今まで第二次大戦のことを知らなすぎた自分を反省し、これを機会に戦争の真実とあらためて向き合っていきたいと思った。

(注1)のちのA型肝炎と思われる。

(注2)『若い医学徒への伝言』の最後にある本間博士自身が作られた年譜、御息である本間栄氏の「本間日臣から若い医学徒への伝言」(順天堂医学49・4)(2004)、『本間日臣の復活リレーエッセイ医学の道』の後輩や友人などの諸氏の文章を参照。

(注3)中山義秀自身が作成した年譜には削除されている。

(注4)娘の結婚に揺れる父親の気持ちを描いた作品「華燭」を「改造」(昭和二十二年四月)発表し、これはのちに映画化もされている。

(注5)昭和二十四年、文芸春秋社から刊行された『テニヤンの末日』の後記。

(注6)中略の部分に「テニヤンを読んで未見の川上定氏が『運命の島』といふ自著を寄贈していた。サイパン島の玉砕を記したものである」とある。

(注7) 浦部晶夫「サザーン・クロスとテニヤンの末日」(「学士会会報」835号、2002・1) など。

(注8) 戦争文学の代表作ともいうべき竹山道雄の「ビルマの豎琴」(昭和二十二年二十三年)や大岡昇平の「俘虜記」(昭和二十四年)は編集方針からか入っていない。もちろんその後書かれた大岡の「レイテ戦記」や井伏鱒二「黒い雨」、また近年評価の高い山田風太郎「戦中派不戦日記」なども入っていない。戦後七十年を経て、新たな太平洋戦争の戦争文学や記録の集大成を作るべきであろう。

- ・ 気持ちを表現したもの（感情・思考） 25 26 27 30 31 32 33 36 38 39 40 43 44 46 47
- ・ C2の表現の中には「驚いた」という感情表現は1か所のみで、自分の行動を評価する表現が多い。客観的に自己を見つめている。
- ・ 現地に行って、見て聞いて深く感じたことが分かる文章となっている。傍観者になっていてはダメで、積極的に参加することから大切なものが生まれてくるととらえることができたことに共感する。

生徒 ABC の作文において事実表現と感情・思考の表現の出てくる割合はボランティア活動以前、以後で変化はなかった。ただし、活動後の作文ではより事実を認識し、生きる目標が明確になったと考えられる。

Ⅳ おわりに

東日本大震災から5年たとうとしている。2011年9月より仮設住宅訪問を継続している。特に東松島の矢本運動公園仮設住宅に何回も行っている。住民とも顔見知りになり、行くたびに旧交を温めている。最近、400所帯から300所帯に減少している。昨年より仮設住宅を出て、新しいところに住む人が増え始めたためだ。同市内の東矢本駅北団地（あおい地区）への引っ越しだ。その団地は、住民同士の話し合いで街並みルール（家の建て方、植栽など）が決められた。街の美観を守る日本一の団地を目指している。初代の西地区仮設住宅自治会長のOさんは昨年引っ越した。2代目のSさん、東の自治会長のOさんも今年の7月に引っ越す。また、市営住宅に越したFさんKさんは今でも仮設住宅集会所で毎週木曜日に開かれているお茶会に出席している。この人たちは3つのコミュニティーの中で生きている。震災前のつながり、仮設住宅でのつながり、新しい団地でのつながり、なかでも仮設住宅の4年間のつながりは強いものがある。東のOさんは東松島の「青い鯉のぼりプロジェクト」を起こし全国的に活躍している。住民の新生活へのパワーを感じる。

また、矢本運動公園仮設住宅は町の中心部にあるためか、周辺部の仮設住宅からここへ越してくる人もいる。市内の瓦礫も消え、震災遺構は石巻の門脇小学校、大川小学校を残すのみとなった。両校ともいつ壊されるか分からない。震災はどんどん風化していく。たとえ、住む人が変わっても仮設住宅がある限り、訪問活動は継続したい。

参考資料

平成28年3月27日のニュースによると、東日本大震災で児童ら84人が犠牲となった宮城県石巻市の大川小学校について、石巻市は震災遺構として校舎全体の保存を決めた。

「（大川小の）校舎全体を保存することとして、周辺については、慰霊と追悼の場としての環境整備を行なっていきたい」（亀山紘 石巻市長）

大川小学校の保存をめぐるっては、市民の間でも保存の是非をめぐる意見が分かれていたが、市は震災の教訓を後世に語り継ぐ防災教育の場として保存を決めた。

一方、津波と火災の被害を受けた同じく石巻市の旧門脇小学校の校舎については、一部保存を決めた。

などがよく書けている。講演を聞くことで自分自身の経験がよみがえり、認識を深めているのがよい。

6. (8月10日のボランティア活動終了後) C2

23東日本大震災から今年で4年が経つ。

24あの日小学6年生だった私も高校2年生になった。

25震災当時は電気が点かず水も出ない状況になり、毎日余震に怯えていたのをよく覚えている。

26今までに体験したことのないことでとても不安だった。

27そして一番印象的だったのはテレビのCMだ。

28どのチャンネルをかけても同じものしか映っていなかった。

29その後、自分たちより東北の方の被害がひどいことを知った。

30何かボランティアをしたいと思ったこともあったが何もできないままになってしまった。

31今回、宮城の被災地へのボランティアがあると聞いて「絶対参加しよう」と思った。

32テレビでは分からない現地の人の話を聞きたい自分の目で見たいそして、力になりたいと。

33東松島の仮設住宅では歌を歌った。集会所には事前に案内チラシを配布してあったこともあり、多くの人が集まっていてとても緊張した。

34一部の歌詞を忘れてしまったアクシデントもあったが最後まで気持ちを込めて歌いけることができた。

35私がおばあさんにマッサージをすると、震災の時どんな状況だったのか話してくれた。

36津波で家が流されてしまったということや身一つで逃げ出したことなどを聞いて、想像してみるだけでどれほど怖かっただろうと思った。

37おばあさんは、肩を揉んでいると「疲れちゃうからもういいよ、お話、しましょ。」と何度も言うてくれた。

38最後に訪れた仮設住宅の人たちが元々住んでいた場所を見て驚いた。

39一面砂しかないこんな場所に住宅があったとは思えなかった。

40波の怖さが身に染みた。

41茨城から5時間で着いてしまう場所。

42それしか変わらないのに被害の大きさは全然違うものだった。

43自分が経験したものは比べものにならないと思った。



被災者の話を聞く 2015.8.10

44実際に現地に行き、自分の目で見て感じることは大事なことで改めて思った。

45これから時間が経つにつれて忘れていってしまうことが増える。

46自分が経験したこと今回聞いたことを多くの人に伝えていきたい。

47そしてこれからも見ているだけの傍観者にならないようにボランティア活動に積極的に参加していきたい。

・様子を表現したもの(事実) 23 24 28 29 34 35 37 41 42 45

- ・様子を表現したもの（事実）21 24 27 28 29 30 32
- ・気持を表現したもの（感情・思考）19 20 22 23 25 26 31 33 34 35 36 37
- ・B2の表現の中には「嬉しかった」という感情表現は1か所のみで、自分の行動を評価する表現が多い。客観的に自己を見つめている。
- ・ほんとうに被災地の方の役に立てるのかという不安な気持ちや、おじいさんから聞いた髪の毛を食べてしまった魚の話や暮らしにくい仮設住宅の話、実際に見た被災地に一軒だけ残された家や墓の様子など、具体的に書かれているのが感動的だ。読む人に生々しく感じられる。作者が何に感動したのかがよく分かる。

5. 生徒Cの作文（6月1日の講演終了後）C1

- 1 当たり前のことが当たり前でなくなる。
- 2 そんなことを思い知らされたのが、東日本大震災だった。
- 3 電話はつながらず、電気は点かない、水も出ない。
- 4 今までしてきたことが何もできなくなってしまったことをいまでもはっきり覚えている。
- 5 時間が経つにつれライフラインが復旧してすぐに元の生活に戻ることができた。
- 6 しかし被害の大きかった東北は今でも復興のための作業が続いている。
- 7 私は体育館に避難して過ごすことはなかったが、想像するとすごく大変だと思った。
- 8 1日24時間ずっと一緒にいることを何か月も送っている。
- 9 1日や2日の短い期間であれば平気だが、そうではない。
- 10狭い範囲の中でプライバシーも守られずに生活するのはストレスだろう。
- 11体験したことないことは実際に聞きに行きコミュニケーションをとることが大切ではないか。
- 12そんなことができるのがボランティア活動である。
- 13それをする事で現地の様子を直接見ることができる。
- 14また現地に住んでいる人を喜ばせることができるのではないか。
- 15仲良くなることで、いろいろ話が聞ける。
- 16私は中学の時に福島から避難してきた友達にいたが、声をかけにくかったことをよく覚えている。
- 17あまり福島のことを触れては嫌だろうし、と考えるうちにどのように話したら相手を傷つけないか分からなくなった。
- 18被災者とはいっても被害の少なかった私たちにできることはたくさんある。
- 19すべてを実行することはできないかもしれないが、自分がやれることを精一杯していきたい。
- 20新しいものに流されるのではなく、出来事を風化させないためにも体験した私たちは忘れてはいけない。
- 21平和が続いているうちに目標を定めそれに向かって学んでいく。
- 22残された時間を有効に活用したい。

- ・様子を表現したもの（事実）1 2 3 4 5 6 8 9 11 12 15 16 18
- ・気持を表現したもの（感情・思考）7 10 13 14 17 19 20 21 22
- ・C1の表現はA、Bに比べて事実の描写が多い。「大変だ」という感情表現が1か所みられる。その他は、比較・判断・評価・問題解決と思考の糸口がみられる。
- ・自分自身の被災当時のことや福島から避難してきた友達に声をかけることがためらわれたこと

くれるということは素晴らしいと感じた。

17そして、私たちが今当たり前に生活していることに感謝しなければならないと考えることができた。

18東日本大震災の時に感じた、家族の大切さ、友達の大切さなどをいつまでも忘れないでいたい。

・様子を表現したもの（事実）3 4 7 9 10 13

・気持ちを表現したもの（感情・思考）1 2 5 6 8 11 12 14 15 16 17 18

・B1の表現の中に、「驚いた」「素晴らしい」という感情表現が2か所みられる。その他は、比較・判断・評価・問題解決と思考表現がみられる。

4.（8月10日のボランティア活動終了後）B2

19私は、今回の被災地ボランティアを通してたくさんのことを学んだ。

20震災があってから被災地の方々が辛い生活をされていることは知っていたが、私に出来ることはないと思っていた。

21しかし、被災地ボランティアのお知らせを見て少しでも力になれるならやってみたいという気持ちになり、ボランティアに参加した。

22被災地の方々の前で発表する出し物の練習をしている時、「これで本当に被災地の方々の力になれるのかな」という不安でいっぱいだった。

23行くと決めたものの、力になれる自信がなかった。

24当日、仮設住宅を訪れると、被災地の方が笑顔で迎えて下さった。

25全員で合唱をしている時に涙を流されている方や出し物を発表している時に笑顔で見て下さっている方がいてとても嬉しかった。

26私は人前で発表することが苦手でもともと緊張したが、今回の発表で自信を持つことができた。



歌の発表勝田高 2015.8.10

27発表後のマッサージでの交流では2人のお祖父さんとお話することができた。

28「震災後の海の魚の中には髪の毛が入っていたんだ」というお話や「仮設住宅の部屋が狭くて、夏は暑くて冬は寒くて大変だ」というお話を聞くことができた。

29魚が津波でなくなった方の髪の毛を食べてしまったということだった。

30茨城で普通に生活しては聞くことができないお話を聞くことができてとてもいい経験になった。

31毎日普通に生活できることに幸せを感じた。

32その後、津波がきた場所へ行き、津波の話を聞いた。

33今は工事が始まっていたが、一軒だけ残された家やお墓を見て震災の悲惨さを感じた。

34もう二度と災害でたくさんの人を亡くさない為に私たちも考えなければならなかった。

35今回の被災地ボランティアを通して命の大切さを学んだ。

36何か災害が起こったときは命を一番に考えようと感じた。

37今回の経験を生かしてこれからも生活していきたいと思う。

- 26どんなに時間があるように感じて、そんなことはなく、いつか終わりが来てしまう。
- 27その終わりはいつ来るかわからないからこそ、命を大切にすべきだと改めて感じました。
- 28三つ目は、一生懸命やることの大切さです。
- 29私たちの班は開始直前に少しのトラブルがあり、失敗してしまったところなどがありました。
- 30ところが、みんなが笑顔で『とても良かったよ』と言って下さり、とても嬉しかったです。
- 31どんなに自分たちに不都合があろうと、一生懸命やり続ければ思いは届くのだと思いました。
- 32四つ目は、私たちを取り巻く環境にいるすべての人たちに感謝するべきだということです。
- 33家族、友達、先生、地域の人々……みんながいるからこそ、私は今回のボランティアにも参加することができ、安全に行くことが出来たのです。
- 34家族は、なくてはならないとても大切な存在で、これからも長く付き合っていく上で、『感謝すること』はとても大切だと思いました。
- 35また行く機会があったら、行きたいと思いました。
- ・様子を表現したもの（事実） 20 21 29
 - ・気持を表現したもの（感情・思考） 22 23 24 25 26 27 28 30 31 32 33 34 35
 - ・A2の表現の中には「嬉しかった」という感情表現は1か所のみで、自分の行動を評価する表現が多い。客観的に自己を見つめている。
 - ・短文を積み重ねた簡潔な文章となっていて、感想文に比べると文章に力がある。それは現地に
出向き、ボランティア活動に参加した感動から生まれたものである。

3. 生徒Bの作文（6月1日の講演終了後）B1

- 1 私は今日、塙先生のお話を聞いて二つのことを考えた。
- 2 一つ目は東日本大震災を忘れてはいけないということである。
- 3 震災から4年たった今、世間では2020年に行われる東京オリンピックの記事が増えてきている。
- 4 しかし、被災地では仮設住宅で生活している方がたくさんいる。
- 5 日本が明るくなるのはいいことだが、その前に、被災地のことを考えるべきなのではないかと私は思った。
- 6 二つ目はボランティアの大切さである。
- 7 私は高校生になってから、ボランティアに参加していない。
- 8 しかし、今日のDVDを見てボランティアに参加したいと思うことができた。
- 9 このDVDは、高校生が被災地を訪れて被災者の方と交流するというものだった。
- 10 前から、被災地の力になりたいと考えていたが、何をすればよいのか分からずに行動することができなかった。
- 11 しかし、これからは積極的にボランティアに参加して少しでも多くの人の力になりたい。
- 12 被災地の方だけではなく、高齢者の方や子どもたちの力になりたいと考える。
- 13 今日お話をしてくださった塙先生は高校生と一緒に被災地を訪れてボランティアをなさっている方だ。
- 14 行動することができてすごいなと驚いた。
- 15 仮設住宅が無くなるまで続けるということだったから、私も参加してみたいと思った。
- 16 私たちが被災地に行って、マッサージをしたり少し会話をするだけで被災者の方が笑顔になって

なった。訪問した生徒の中から3名ほど選び、6月1日の講演終了後と8月10日ボランティア活動終了後の作文を比較して、気持ちの変化を考えてみる。

1. 生徒Aの作文(6月1日の講演終了後) A1

1 私は今回、震災についての話を聞いて感じたことがいくつかある。

2 まず一つ目に、想像以上に被災地の現状はひどいということだ。

3 私たちの住むひたちなか市もそれなりに被害を受けたと思っていたが、東北の方とは比べものにならない。

4 未だに仮設住宅に住んでいる人の数は、とても多いことが分かった。

5 平和を取り戻しつつある場所と、今でも復旧のめどがたたない場所の差が広いことも問題の一つなのだと改めて思った。

6 二つ目にボランティアの大切さについてだ。

7 ファミレスやコンビニ、学校や公共の場で行っている募金活動もそうだが、あまりボランティアに積極的に取り組んでいる人を見ない。

8 いたとしてもごく少数の大人や中高生、そして女性ばかりだと思っていた。

9 しかし、あの映像を見て考えが少しずつ変わってきた。

10 参加しようとして参加せず、後悔した人は果たしてどれほどなのだろうと感じた。

11 最後に、本当に今の日本、全世界でもそうだが異常気象が多すぎることだ。

12 日本では地震・噴火・天候不順(気温)があげられるだろう。

13 世界的に見ても地震は増加傾向にある。

14 また、東日本大震災のような超大型地震が起きるのは、何としても避けたいと思う。

15 そしてさらに噴火についての対策もしていきたい。

16 今はまだ無理だとしてもいつか災害を予知し、犠牲者の数を減らしていけるよう私たちが考えていくべきなのだ。

17 塙先生が行っているボランティア活動は、とても素晴らしい。

18 行動に移すことができる力を私も見習いたい。

19 そしてこのボランティアに参加することができる機会があったら、ぜひ参加したい。

・様子を表現したもの(事実) 7 11 12 13

・気持ちを表現したもの(感情・思考) 1 2 3 4 5 6 8 9 10 14 15 16 17 18 19

・A1の表現の中に、「ひどい」「多い」「素晴らしい」という感情表現が3か所みられる。

その他は、比較・判断・評価・問題解決と思考の表現がみられる。

2. (8月10日のボランティア活動終了後) A2

20 私は今回、学校であった講演会でこのようなボランティアがあることを知りました。

21 そして、この8月に参加することが出来ました。

22 そこで、学んだことが四つあります。

23 一つ目は、ふれあうことの大切さです。

24 どんなにテレビや新聞で状況を把握することが出来ても、ふれあって初めてわかることがあると思いました。

25 二つ目は、今ここにいる時間、命が大切だということです。

く。戦争のことを考える。あれは過去のことです。70年前の出来事だと思います。しかし、現在、地震や火山の爆発があり、他国で戦争が起きている。これから日本もどうなるかわからない。残された時間は限られています。あと10年間きちんと勉強ができれば幸せです。限られた時間を有効に使って自分の生き方を決めてください。

3. 生徒代表謝辞

今日は私たちのために、貴重なお話をしていただきありがとうございました。私は被災地でのボランティア活動の現状を知ることができて、とてもよかったと思います。東日本大震災から4年たった今でも多くの人たちがまだ仮設住宅で苦勞しています。それに比べて私たちはとても恵まれた生活をしていることを実感しました。瓦礫撤去が進んで、更地が広がっている光景を見ながら当時のことを話してくれる様子を見ました。また、ボランティアによって元気をもらって笑顔になっているのを見て、私も参加したいなと思いました。少しでも早く復興が進むように願っています。

今日は本当にありがとうございました。

4. 講演をして気づいたこと

この講演では原稿を読むのではなく、導入・展開・まとめの流れを考えいつも話しているということだ。毎回話が違っている。最初DVDを見ている生徒の様子を観察している。学校によっては、集中度合いが異なる。視線が、画面に集中している学校の場合は、導入部の反応が良い。話を始める時、お互いにどんな人なのか注意深く見ている。生徒は、今までに多くの先生と出会い話を聞いてきた。どんな人間なのか、敏感に感じてしまう。どこにでもいる、身近な存在と感じさせるように努力し、話した。まず、話し手聞き手の共通点を探し、それを話題とした。導入部においては最近の社会事象を取り上げた。6月の勝田高校の場合は小笠原沖の地震の例を出し、自然現象の脅威を訴えた。2月の日立一高の場合は清原選手の薬物事件から人間の孤立状態の悲劇を訴えた。

講演の場合、マイクを使用し全体に向かって話をしている。そのため対象がはっきりしなくなることがある。お互いの集中が切れそうになる時は、会場に向かって問いかける。そして、一部の生徒にマイクを向け反応を見る。文中の「 」のやりとりがそうである。導入部で1回、展開部で5回、まとめのところで1回である。展開部が多いのは会場での気持の高揚が考えられる。

話の展開の仕方を工夫した。事実を述べるときは、できるだけ冷静に話をする。それに対して気持を語るときには、情熱的に訴えかけるようにした。強調したいときは、表現を変えて繰り返して言う。ここが文章化したときに、くどいと思われるところだ。講演ではそう感じられない。

次に、話の内容に憧れを抱かせる。自分もやってみたい、行ってみたいと感じさせるように話を展開する。15分のDVDでは良いところしか映っていない。実際は、大変なこともたくさんある。

さらに、生徒に考えさせる。茨城と宮城・自分たちの住んでいるところと被災地を比べる。昔の日本と現在の日本を比べる。日本と外国を比べる。比べることにより考えが深まっていく。そして、何が出来るか。どうすればいいのか考える。生徒に対する期待感を表現すると、次の行動が生まれることが多い。

Ⅲ 生徒の作文から分かること

講演終了後、勝田高校2年生の生徒作文が届いた。多くの生徒が実際に現地に行って活動したいと作文を寄せた。そこで、8月10日に東松島仮設住宅西集会所にボランティア訪問をすることに

しょうか。初めは分からなかったのですが、それは話をしても、周囲に伝わらないからかもしれません。私たちは遠くから来て、話してもその時だけのつながりだから安心感がある。話をしても大丈夫なのです。あまり近い人には言いたくない。話をすると、その人の気持ちが少し楽になる。私たちが、歌ったり踊ったりマッサージをしたりする。そういうふれあいは、普段できるようでできない。私たちはそんなにやっていないと思います。

「親、おじいさん、おばあさんにマッサージをしますか？」

被災地の人たちもそうです。孫にマッサージをやってもらったことは、ほとんどありません。身近なところでボランティアをやればいいのと言われますが、身近なところではなかなかそういう気持ちが起きません。少し離れると起きるのです。人間とは面白いものです。高校生に聞いてみると家でマッサージなどはやったことはないと言います。被災地の方もそうです。遠く離れた人が来ると、人間の温かみを感じます。毎日ボランティアをやるわけではない。たまにやろうよと言うとできる。そして、その人の一番いい面が出てきます。たまに来てくれた人だから、一番いい面が出る。いい面同士がぶつかり合う。そのことがお互いの生きる支えになる。ボランティアに1回しか行けないと言われることがあります。なかには2回3回と行く人もいます。でも、私は1回だけでもいいと思います。1回だけでも、被災者と出会った時のことを覚えていれば、一生の宝です。

・まとめ (7分5秒)

3.11が風化しつつあります。あれから1年2年3年ではなく、あれから5年ではなく、これから5年です。世の中はいろいろな流れがあります。

「これから5年先に何があるの？」

「2020年 オリンピック」(会場からの反応)

日本はあと2年3年もするとオリンピックに向けて大きな力が動き出す。震災から何年と言わなくなる。世の中が、明るい方向に向かっているのは結構なことです。しかし、日本の現状を考えると、もう少し危機感を持たなければいけないと思います。毎日のように、国会で集団的自衛権の話し合いがなされています。人ごとのように聞いている人もいます。なぜあんなに夢中で話し合っているのでしょうか。それは、私たちの生活に大きな関係があるからなのです。戦後70年、70年間戦争はなかった。でも歴史の勉強をすればわかりますが、100年間平和なことはありません。いつ何が起きてもおかしくない。私は戦争を経験していない。皆さんも経験していない。人間はこれからどうなるのでしょうか。人間は愚かだから、間違いを繰り返します。平和のうちに自分でできることをきちんとやる、いつどうなるかわからないのです。

小学校、中学校、高校と競争がありましたね。部活も競争です。勝った人、負けた人が必ずいます。でも、人生は学校の中の競争とは違います。自分の戦いの目標が定まらないうちに行き詰まります。自分の戦いの目標は何なのか。早く分からないといけません。自分の目標があれば順位は関係ない。生きるスピードは、その人によって違う。その人の学習能力や発達の速度は人によって違う。ゆっくりの人もいれば早い人もいます。被災地に行くとうちの存在価値がよく分かります。どうやって分かるかというと、私はこの人に喜ばれている。その人のために役に立っているということを実感します。私は若い世代を被災地に連れて行って、その人の生き方が変わればそれでいい、次の世代が自分の目標を見つけるきっかけになればいいと思っています。平和なうちに自分の目標をしっかりと決めて、着実に学んで欲しいです。平和な時間は限られています。私たちが広島、長崎、沖縄に行

ありません。ばらばらに食事をし、ばらばらに風呂に入り、ばらばらに寝る。それが当たり前です。それが、震災によって壊され、元に戻った。人間とは何なのかなと思うと、やはり脇に人がいると嬉しいのです。24時間いると辛いけれど、いると嬉しいのです。あの頃「きづな」、「つながり」という言葉がもてはやされました。今はあまり言われません。以前は、当たり前につながっていたのが、だんだん切れてきました。現在はわずかにスマホや携帯でつながっています。「元気?」「元気だよ。」文字だけで、顔が見えない。顔が見えない世界で生きている。「あなたと私は友達だよね。」「うん、そうだよ。」と言っています。本当にそうでしょうか。違うかもしれません。近くで、顔を見て話をすることが大事です。顔を見て言っていると、本当かどうか分かります。また震災によって顔が見える世界、人の気持ちが分かる世界を思い出しました。

「震災のころは、何年生だったのかな?」

「小学校6年生。」(会場からの反応)

卒業式間近で、4月から中学生だと思っていましたね。気持は中学校に向いていたでしょう。常磐線は止まり、入学式はどうなるか分からなくなりました。混乱の中で中学校生活がスタートしました。茨城は4月に復旧し、普通の生活ができました。しかし、東北は復旧しませんでした。ずっと止まっていました。東北に出かけるようになったのは、茨城は終わったが、東北地方はまだまだだったからです。茨城では4月にはライフラインも復旧し普通の生活が戻りました。避難所訪問の活動も4月9日までに終わりました。しかし、東北のほうはどうでしょうか。6月に瓦礫撤去ボランティアに参加しました。1日中活動し、ある程度満足感を得られましたが住民と交流ができませんでした。何か物足りない。そんな時、偶然地元住民と知り合いになり、仮設住宅訪問ができるようになりました。そして、9月から仮設住宅に行くようになったのです。最初は20～30人ぐらいでしたが、だんだん40人に増えてきました。高校生と行った時に何が変わったのでしょうか。

見ると聞くとは大違いということです。みなさんも、津波の映像、震災遺構の映像を見たと思います。実際に行くと全然違います。目の前に建物の残骸がたくさんある。何もない更地の様子を見ると、ここは日本なんだ。戦後、何もなくなってしまった。そこから、ここまで復興してきた。日本の原点のような被災地を見たときに、ここから新しい日本が始まると思いました。被災地の方は頑張っている。頑張らなければ生きていけない。特に宮城県、岩手県の方は津波が来て、自分の住んでいる処が流されて、命からがら逃げてきた。命からがら仮設住宅にきた。首まで、海の水に浸かっていた。ヘリコプターで救助された人たちがたくさんいる。この人たちは、そういう中を生き抜いてきたのだ。家族の方が亡くなった人もいる。最初は震災のことはまったく話してくれませんでした。1年、2年経過するとやっと話してくれようになりました。人は話すことによって癒されます。その当時のことを人に伝えることによって、気持ちが楽になる。

なぜ、この人たちは私たちに話をするのだろうか。茨城から来る人に震災の話をするので



東松島 短大生によるマッサージ 2013.6.20

ました。年寄りや若い子が近くに来るだけでそれだけで嬉しい。同じことをやっても全然違います。住民が私にだんだん慣れてくると、たくさんマッサージを頼まれました。ボランティアは、やはりみんなでやるからできるのです。

「ここから東松島、石巻までバスでどのくらいかかると思いますか？」

「5時間ぐらい。」(会場からの反応)

よく見ていたね。5時間とかかる、長いですね。そこを日帰りでいきます。往復10時間。現地滞在するのは4時間ぐらいです。行くときは5時間かかります。でも短い。みんなで行くとバスの中で練習をしたりするので短い。打ち合わせをしたりすると、あっという間に5時間がたってしまいます。東京に高速バスで行く時があります。2.5時間程度かかり、長く感じられます。現地で交流をして、帰ってきます。帰りもやはり5時間かかります。バスの中で、感想を発表します。すると生徒たちは満足した表情を見せてくれます。やり遂げたという達成感があるのですね。

・展開部 (15分30秒)

皆さんは生きている中で、楽しみは何でしょうか。

「学校で何が楽しみですか。」

「友達に会えることです。」(会場からの反応)

友達に会える。これはいいですね。友達がいるから学校に来る。人間は仲間に出会えるということが楽しみなのです。被災地でも仲間に出会えることが楽しみです。でも状況が変わるとどうでしょうか。人間というのは勝手なものです。みなさんは、自分の家があって自分の部屋があって、学校に来る。

「24時間一緒だったら、どうかな？」

被災地で一番大変なのは24時間いつも一緒なのです。体育館の中に1,000人以上いる、一晩中一緒です。また、この状態で1か月2か月と続く。それが被災地の生活です。それからやっと仮設住宅に移る。仮設住宅というのは、ちょうど工事現場のプレハブ小屋を想像してくれればいい。仮設住宅の夏は暑い。冬は寒い。エアコンはあるが壁が薄いので、つらい。今まで、大きい家に住んでいた。それぞれの部屋がある家に住んでいた。それが仮設住宅に家族5人が押し込まれる。そういう生活はどうでしょうか。

「あなたは自分の部屋がありますか？」

「ありますよね。夜は一人で寝るのですか？」

自分の部屋があって、一人で寝ているでしょうね。私は、小さい頃6畳部屋に布団を敷いて、兄弟3人で寝ていました。襖一枚隔てて隣の部屋に両親が寝ていました。寝息が聞こえても、いびきが聞こえてもあまり気になりませんでした。だんだん世の中が変わってきました。うちの子供たちの時代になると個室で寝るようになりました。幼稚園児ぐらいまでは、みんなで川の字になって寝ていました。今考えると、非常に幸せな時代でした。小学生になるとそれぞれ個室が欲しいということではばらばらに寝るようになりました。それ以来、家族は一緒に部屋に寝ていません。今まで当たり前だったことが、当たり前でなくなっていました。家族と一緒に部屋に寝るという生活は40年50年前までは当たり前でしたが、現在はばらばらの生活が当たり前です。

私たちが、震災によって得たことと、失ったことは何でしょうか。例えば、一緒に部屋にいます。一緒にご飯を食べる。一緒に風呂に入る。こんなこと、以前は当たり前でした。今は当たり前では

なかでも、那珂高校・友部高校・日立一高は昨年に引き続き実施している。今年は初回より録音し、自身の話し言葉を振り返ることにした。

Ⅱ「道徳」に係る講演会

「被災地の現状理解とボランティアについて」

平成 27 年 6 月 1 日（月）勝田高校 体育館

2 学年対象

内容

1. 15 分のドキュメンタリー番組を見る。

「後悔から始まったボランティア」 JWAY 制作 DVD

平成 25 年 12 月 23 日那珂高校・多賀高校・太田一高・日立二高 OG・一般市民合わせて 35 名が東松島仮設住宅を訪問した。そのことを JWAY がドキュメンタリー番組として制作した。

2. 約 30 分の講演をする。(28 分 47 秒)

・導入部 (6 分 12 秒)

5 月 31 日の新聞では、30 日の午後 8 時 30 分ごろ小笠原沖に M8.5 の巨大地震があり、震度 5 が小笠原諸島母島と神奈川県二宮町で観測されたと報道されました。最近、日本どうなっているのかと思うことがよくあります。地震、火山噴火などがよく起きる。震災から、少しの地震ではあまり驚かなくなった自分がいます。どうですか？少し地震があっても驚きませんよね。それが自分の中での「慣れなのだな」と思っています。

これは、2 年前の映像なのですが、私はよくやっているなと思うことがあります。自分で自分のことを褒めてはいけないのですが、よくやっているな、あの人は…。しかし普段の生活の中でボランティアを毎日やっているわけではありません。でもあのように頑張れるといいなと思うことがあります。なぜでしょう。普段から、誰も毎日張り切っているわけではありません。「みんなで一緒に行こうよ」と思うと、自分の中で頑張ろうとする気持ちが生れます。ボランティアも一人ではできない。みんなで行こうよと言うからできる。一人でボランティアに来ました。といっても何もできません。高校生がいる。「じゃボランティアに行こうよ。」と言ってできることです。

2011 年の震災時に、日立市内の避難所に私一人で行きました。「こんにちは。何か手伝えることはありませんか？」と言うと、避難者から警戒され不審者に思われてしまいました。こちらでは何かしてあげたいなと思っても、結構ですと断られてしまいます。学校もない、部活もない、自宅待機をしていました。そこで学校の近所に住んでいる生徒に「避難所に一緒に行かないか」と電話をしました。被災者の肩もみをしたり、話を聞いてあげたりしました。若い人を連れていくだけでよかったのです。女子高校生たちを連れていくと、対応が変わりました。若い人の力は凄いと思い



日立市内避難所訪問 2011.4.5

報 告

若い世代への伝言2 —— 震災ボランティアを通して

埴 雅文

I はじめに

昨年度の紀要「若い世代への伝言」の中でも述べた通り、東日本大震災以降、宮城県の仮設住宅を高校生・短大生・市民と一緒にボランティア訪問することが重なった。平成27年度は次の①～⑤のように5回実施した。

- ①平成27年6月18日（木）茨城女子短期大学保育科1年94名が東松島仮設住宅を訪問した。
（大型バス2台使用）
- ②平成27年8月10日（月）勝田高校2年39名大成女子高看護科2名教員4名計45名が東松島仮設住宅を訪問した。（大型バス使用）
- ③平成27年9月10日（木）茨城女子短期大学公開講座で一般市民29名が東松島仮設住宅を訪問した。（大型バス使用）
- ④平成27年12月5日（土）保育士・一般市民13名が東松島市仮設住宅を訪問した。（マイクロバス使用）
- ⑤平成28年3月24日（木）大成女子高看護科18名勝田高校2年10名教員3名計31名が東松島仮設住宅を訪問した。（大型バス使用）

昨年より訪問回数が減少した大きな理由はバス賃の値上げである。平成26年4月1日から国土交通省の指導によりバス運賃が改定になった。この影響で大型バスを予約することが困難になった。約2倍の値段になり、参加者の負担が大きくなったためである。④のようにマイクロバスで行くのがやっとの状態である。

また本年度、昨年につづいて県内の高校で道德の時間に「被災地ボランティア」の講演をすることができたことは、被災地の現状を伝えるのに役立った。

・道德講演記録

平成27年度は東日本大震災のボランティアの記録を高校への出前講座としてさらに浸透させたいと思っていた。4月より1学年主任に講演の案内を送った。その結果次の学校で実施することができた。

- ①6月1日（月）14：25～15：15 勝田高校 体育館
- ②6月8日（月）14：25～15：15 那珂高校 多目的教室
- ③7月9日（木）15：25～16：15 大成女子高看護科 体育館
- ④9月3日（木）13：25～14：25 佐竹高校 武道場
- ⑤10月26日（月）13：30～14：20 友部高校 格技場
- ⑥12月16日（水）14：25～15：15 太田二高 多目的ホール
- ⑦2月8日（月）15：45～16：40 日立一高 体育館多目的室

5. まとめ

保育士養成群と一般大学生群は、虐待の認識が高い水準で共有されているものであれば一致していたが、「叩く」といった行為等が、「しつけのため」といった親の動機により、容認できるかどうか、それぞれの群のなかでも意見が分かれた事例において大きな差異があり、保育士養成群は、しつけのためであっても「叩く」ことを「虐待である」、「虐待の疑いがある」と認識する傾向が、一般大学生群と比較して強かった。

日本小児科学会（2014）の「子ども虐待診療手引き、第2版」（注11）に述べられているように、子ども虐待の定義の重要な点の一つは、それに「加害者の動機」が含まれていないことである。つまり、親が子どもを憎んでいても愛していても、親の行為が虐待であるか否かを判断する条件にはならない。子ども虐待は、あくまでも子どもの側に立ち、子どもの健康と安全が危機的状況にあるか否かという観点で判断されるべきものであるからである。

引用文献（注）

- 1) 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局総務課「児童相談所での児童虐待相談対応件数」2014（平成26）年10月8日発表。
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000099975.html>
- 2) 厚生労働省 雇用均等・児童家庭局総務課「子ども虐待対応の手引き」（平成25年8月改正版）、2014（平成26）年4月3日、323p。
http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/130823-01.html
- 3) 山野良一，児童相談所のジレンマ，上野加代子（編）『児童虐待のポリティックスー心の問題から「社会」の問題へ』明石書店，53－99，2006年。
- 4) 高橋重宏・庄司順一・中谷茂一・山本真実・奥山真紀子・加部一彦・加藤 純・才村 純・北村定義，子どもへの不適切な関わりのアセスメント基準とその社会的対応に関する研究（3），日本総合愛育研究所紀要，33，127－141，1996年。
- 5) 鈴木祐子・木村恭子・刀根洋子・及川裕子，子ども虐待の認識―ビネット調査を試みて―，日本赤十字武蔵野短期大学紀要，14，53－66，2001年
- 6) 内閣府，平成26年版 子ども・若者白書（全体版），2015年
http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26honpen/b1_03_03.html
- 7) 上野加代子，児童虐待―リスクの個人管理から社会管理へ，季刊家計経済研究，73，33－41，2007年
- 8) 佐藤幸子・遠藤恵子・塩飽 仁・矢本美子，子どもの虐待に対する高校生の意識と意識形成の世代伝播，山形保健医療研究，6，9－15，2003年。
- 9) 遠藤利彦，子育て子どもの基本について考える，教育心理学年報，49，129－161，2012年
- 10) 平田伸子，しつけと虐待の境界と親支援，教育と医学，711，20－28，2012年
- 11) 日本小児科学会 ホームページ「子ども虐待診療手引き」，2014年。
https://www.jpeds.or.jp/modules/guidelines/index.php?content_id=25

と回答した学生は、保育士養成群 88.3%、一般大学生群 64.8%であった。一般大学生の約 3 割は虐待と捉えていないことがわかる。ある学生が「先生、これを虐待だと認めてしまったら、自分は被虐待児だったということですか」と聞いてきたことがあった。自分も子どもの頃、叩かれたり、閉め出されたりしたことがよくあったが、虐待されたとは思っていないという。

誰しも自分の経験や価値観を基準に物事を判断するものであるが、虐待の認識においても、同様のことが言えるであろう。高校生とその両親に同様のビネット調査をした佐藤ほか(2003)(注 8)も、虐待の認識において正の相関がみられたと報告している。

鈴木ほか(2001)は、虐待の認識において性差があることを、女性の「母性性」によるものでないかと分析しているが、それに加え、男性の方が子ども時代に叩かれてしつけられたり、閉め出された養育体験を多く持つ傾向があり、それらが虐待の認識に及ぼしている影響もあると考えられる。

7) 虐待する親を理解する教育の重要性

一般大学生群と比較して、保育士養成群の虐待に対する認識の高さは、評価できることであるが、保育士として現場に出た時に、保護者と虐待の認識の差が大きいと保護者に対して厳しい要求をしてしまうことも考えられる。

子どもが大好きで保育士になりたいと思っている学生たちにとって、親が子どもを愛せない、虐待するなんて信じられないと考える傾向は強い。しかし、虐待について学ぶ時に、虐待をしてしまう親に対する理解を伴わなくては学習の意味がない。虐待は親の SOS であり、「虐待」という認識は「子どもと家族への援助」へのきっかけであって「加害者の告発」ではないからである。

8) 高校生に対する虐待の予防教育の重要性

本論の冒頭でも記述したように虐待の相談件数は増え続けている。単に虐待の認知度が高まったことによって伸びている数字ではない。その要因のひとつに、医療が進歩したことにより、低体重出生や早産でも助かるようになったが、それらが、虐待のリスク因子になることも指摘されている(遠藤, 2012)(注 9)。医療の進歩に、親子をサポートするシステムが追いついていないことが問題である。

また、若年層の妊娠・出産・結婚・離婚の現状は深刻な状況にある。15 歳から 19 歳までの「でき婚率」は 81.5%、20 歳から 24 歳までは 63.5%で、その「でき婚」の 44%が 5 年以内に離婚するという厳しい現状がある(平田, 2012)(注 10)。

そのような時代状況だからこそ、虐待が起きる前に、予防のための教育を高校時代に取り組むべきであると考え。今回の一般大学生群のネグレクトに関する意識の低さをみれば、ネグレクトが与える深刻な影響についても学習しなくてはならない。

また、高校生に子育て支援を求める方法を教えることは何よりも重要である。妊娠するリスクの理解、望まぬ妊娠をした場合の支援、経済的に困窮した時の支援、ひとり親になった時の支援、子どもを一時預かってもらえる支援へのアクセスの方法など、虐待の予防教育でそれらを高校生に伝えることは非常に重要であると考え。

の作成したビネット調査を用いて、それぞれの属性による比較を試みているが、看護系大学生の方が、一般大学生より虐待であると回答する割合が高かったと報告している。これは本調査の結果と共通するものであり、小児看護の領域でも子ども虐待は重要な問題であることがうかがえる。

3) 性差について

鈴木ほか(2001)は性差についても言及し、女性の方が男性よりも虐待に対する意識が高い傾向を指摘している。本調査では、性別を回答用紙に記入する欄を作成しなかったため、性差に関する詳細な分析はできないが、保育士養成群の学生の約8割が女性であったのに対して、一般大学生群の女性の割合は約4割ほどであったため、本調査の結果にも性差の影響があったことは推測される。両群の差異に与えた性差の影響の検討は今後の課題とする。

4) 子どもを放置(ネグレクト)することの軽視について

幼い子どもを寝かしつけたあと夫婦で遊びに出かけることに、一般大学生の約6割が、(保育士養成群の学生でさえ約3割が)「問題ない」、「あまり問題ない」と回答しており(図2)、子どもの放置に対する軽視が問題であると考えられる。日本の家族がラスベガスに旅行に行き、子どもが寝たので夫婦で夜中にカジノに行ったら、子どもが目覚まして泣き出し、隣室のホテル客が報告して、帰ってきたら警察が待ち構えていて夫婦とも手錠をかけられ逮捕された記事を読んだことがあるが、国によっては深夜に子どもを残して外出するのは、犯罪行為である。子どもが夜中に目が覚めた時に、大人が家に居ないということは、幼い子どもの心を脅かす重大なことである。子どもの心に与えるダメージは、実は身体的虐待よりもネグレクトの方が深刻なのである。アタッチメントの観点からも絶対に避けるべきである。子どもが将来にわたって安心感の欠如や情動のコントロールに苦しむことがないように、夜中に幼い子どもを放置することは、不適切であると親になる前の世代に教育する必要がある。

5) 貧困は虐待の境界線を破る

実際、核家族であれば、ましてひとり親であれば、やむを得ない事情で、幼い子どもを家に残して外出しなくてはならない時もあるかもしれない。しかしそれが常態化することが問題である。「母子家庭で、母親が子どもを寝かしつけて夜働きに行く」ことを、一般大学生の8割以上が(保育士養成群でも6割以上)が、容認していることも危惧される。

日本の子どもの6人に一人は、貧困ライン以下で暮らすという深刻な状況であり、特に、ひとり親家庭の半数以上は、貧困ライン以下の生活を強いられている(内閣府, 2015)(注6)。生活のためにWワークで昼夜働いたり、先にあげた想定事例のように、就学前の子どもを寝かしつけて夜働きに行く母子家庭の母親も実際にいるであろう。経済的理由が、このようにいとも簡単に虐待の境界線を破ってしまうのである。上野(2007)(注7)も述べているように、虐待は、経済格差の問題が非常に大きい。

6) 自分の受けてきた養育と虐待の境界線との関係

「子どもが悪いことをした時に、家の外に閉め出す」について、「虐待である」、「虐待の疑いがある」

く」ことを容認する傾向がみられるが、一般大学生群との比較においては、大きな差がある。このアンケートの想定事例の設定は「核家族で0歳から6歳までの子ども」としてあるが、一般大学生は「遊びのため」であっても、約6割が夜間、子どもだけを家に残しておくことを容認し、さらに「生活のため」であれば、8割以上の学生が夜間子どもだけを家に残しておくことを容認している。

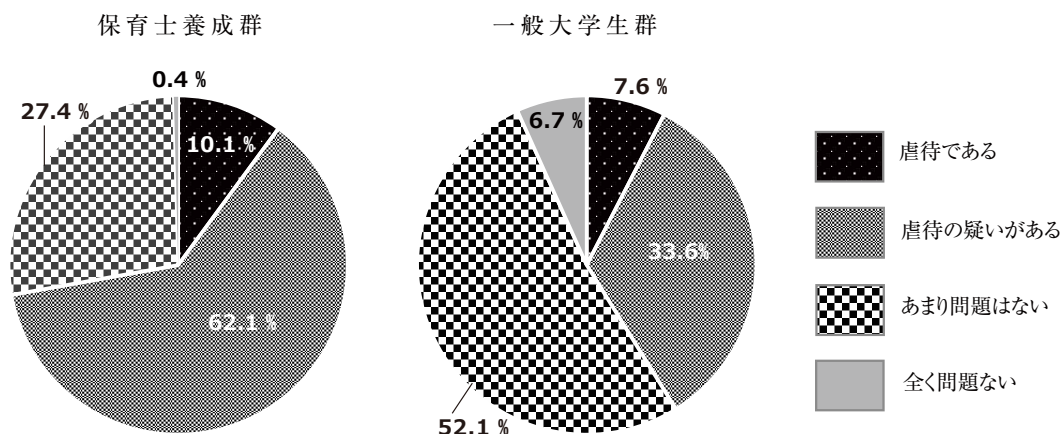


図2 「子どもを寝かし付けたあと夫婦で遊びに出かける」

4. 考察

1) 保育士養成群と一般大学生群との比較

保育士養成群と一般大学生群の虐待の認識がほぼ一致した事例は、結果の1)に示したように、それぞれの両群ともに95%以上の学生が、「虐待である」、「虐待の疑いがある」と回答しており、虐待の認識が高い水準で共有されているものであった。

反対に、両群の認識に差異が認められた事例は、結果2)に示したように、「叩く」、「閉め出す」といった行為が、「子どものため」、「しつけのため」といった親の意図や動機により、容認できるものかどうか、それぞれの群のなかでも意見が分かれたものであった。保育士養成群の学生も2割以上が「叩いてしつける」ことをほぼ容認していたことに驚いたが、一般大学生群は約5割がほぼ容認していた。

保育士を目指す学生の虐待に対する認識が一般大学生よりも高いのは、子ども虐待に関する知識や関心の高さによるものであると思われる。また、保育士養成群の1年生と2年生の回答に大きな差がなかったことから、保育士を目指すという志向性や、高校時代の教育の差も考えられるだろう。高校によっては、希望者は保育技術検定を受けることができ、「揺さぶり症候群」などについても高校時代に検定で勉強したという学生もいた。

2) 看護系学生と保育士養成の学生との共通点

鈴木ほか(2001)(注5)は、医療従事者、看護系大学生、一般大学生を対象とし、高橋ほか(1996)

は、一般大学生群では35.3%、保育士養成群の学生は11.7%であった。

「親がイライラして子どもをたたく」については、保育士養成群も一般大学生群も、98%以上の学生が「虐待である」、「虐待の疑いがある」と回答しているように、子どもへの親の感情的な暴力は虐待であると捉えているが、「しつけのため」、「子どもが言うことを聞かない時」はそれらを容認する傾向は両群ともにある。しかし、その傾向がより顕著なのが、一般大学生群である。翻って言うならば、保育士養成群の学生は、一般大学生よりも「しつけのため」、「口で言ってもわからなければ」、「子どもが悪いことをした時」という親の意図や動機に左右されず、子どもを叩く、閉め出すといった親の行為を、虐待またはその疑いと捉える傾向が強い。

その他、両群の虐待の認識の差異が大きかった事例は「子どもが言うことを聞かない時は、おもちゃを捨てる」「子どものお尻をたたく」、「子どもの顔をたたく」、「子どもを寝かしつけたあと夫婦で遊びに出かける」、「母子家庭で、母親が子どもを寝かしつけて働きに行く」であった。

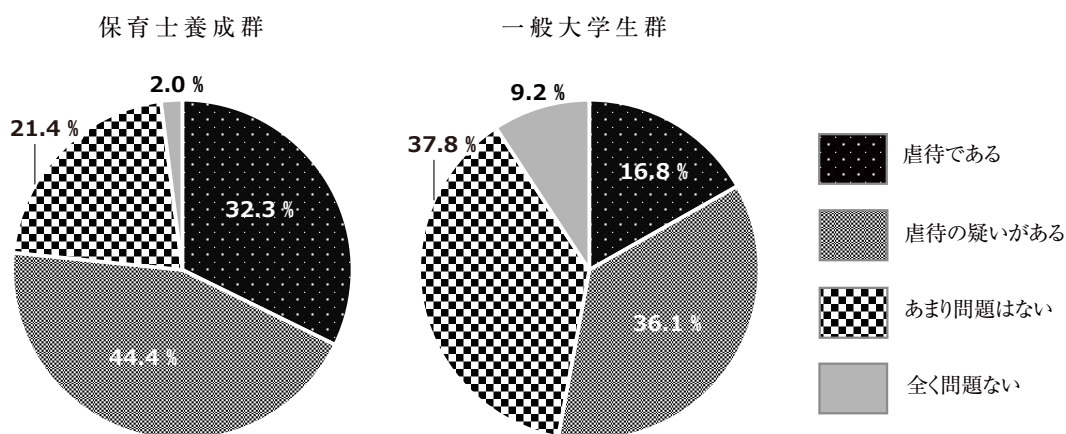


図1 「子どものためを思ってしつけのためにたたく」

3) 子どもの放置（ネグレクト）に関して虐待の意識が低い傾向がある

「買い物をしている間、子どもを車に残しておく」について「問題ない」、「あまり問題ない」と回答した学生は、保育士養成群では35.9%、一般大学生群では52.9%であった。「子ども虐待対応の手引き」（厚生労働省，2014）では、乳幼児を車の中に放置することは、ネグレクトだと例示されており、熱中症や誘拐などの危険があると記載されているが、両群ともに身体的虐待よりも虐待の意識が低いことがわかる。

さらに、「子どもを寝かしつけたあと夫婦で遊びに出かける」について、「問題ない」「あまり問題ない」と回答した学生は、保育士養成群では27.8%であったのに対して、一般大学生群では58.8%であった（図2）。「母子家庭で、母親が子どもを寝かしつけて働きに行く」について「問題ない」、「あまり問題ない」と回答した学生は、保育士養成群では68.1%、一般大学生群では86.5%であった。保育士養成群の学生も、身体的虐待に比較すると「夜間、子どもを家に残してい

表1 ビネット調査によるアンケート結果集計

No.	ビネット項目と属性	全く問題 はない	あまり問 題はない	虐待の疑 いがある	虐待である	平均 との差
1	買い物をしている間、子どもを車に残しておく	保育士養成群	0.0%	35.9%	57.7%	6.5%
		一般大学生群	5.0%	47.1%	37.0%	10.9%
2	子どもが悪いことをした時に、夕飯を食べさせない	保育士養成群	0.0%	8.5%	49.2%	42.3%
		一般大学生群	2.5%	10.9%	57.1%	29.4%
3	子どもを寝かしつけたあと夫婦で遊びに出かける	保育士養成群	0.4%	27.4%	62.1%	10.1%
		一般大学生群	6.7%	52.1%	33.6%	7.6%
4	母子家庭で、母親が子どもを寝かしつけて夜働きに行く	保育士養成群	3.6%	64.5%	27.4%	4.4%
		一般大学生群	25.2%	61.3%	12.6%	0.8%
5	他の兄弟と比較してお前はだめだと言う	保育士養成群	0.0%	21.4%	61.3%	17.3%
		一般大学生群	0.8%	32.8%	55.5%	10.9%
6	あざが残らない程度にしつけのために子供をたたく	保育士養成群	2.0%	20.6%	46.0%	31.5%
		一般大学生群	7.6%	37.8%	33.6%	21.0%
7	あざが残るほどに子供をたたく	保育士養成群	0.4%	1.2%	8.9%	89.5%
		一般大学生群	0.8%	3.4%	12.6%	83.2%
8	口で注意してもわからなければ、たたいて注意する	保育士養成群	1.6%	16.5%	44.0%	37.9%
		一般大学生群	7.6%	34.5%	41.2%	16.8%
9	子供のために思ってしつけのためにたたく	保育士養成群	2.0%	21.4%	44.4%	32.3%
		一般大学生群	9.2%	37.8%	36.1%	16.8%
10	親がイライラして子どもをたたく	保育士養成群	0.0%	0.4%	22.6%	77.0%
		一般大学生群	0.0%	1.7%	17.6%	80.7%
11	子どもの前で親がわいせつなビデオを見る	保育士養成群	0.0%	5.6%	37.9%	56.5%
		一般大学生群	1.7%	11.8%	40.3%	46.2%
12	子どもの前で父親が母親に暴力をふるう	保育士養成群	0.0%	0.4%	31.0%	68.5%
		一般大学生群	0.0%	5.0%	34.5%	60.5%
13	「あんたなんか産まなきゃよかった」と言う	保育士養成群	0.0%	0.8%	26.6%	72.6%
		一般大学生群	0.0%	5.0%	23.5%	71.4%
14	子どもが悪いことをした時に、家の外に閉め出す	保育士養成群	0.4%	11.3%	48.4%	38.9%
		一般大学生群	5.0%	30.3%	38.7%	26.1%
15	子どもを1週間お風呂に入れない	保育士養成群	0.4%	1.2%	16.1%	82.3%
		一般大学生群	0.0%	3.4%	21.8%	74.8%
16	子どもの顔をたたく	保育士養成群	0.4%	3.6%	31.5%	64.5%
		一般大学生群	4.2%	17.6%	29.4%	48.7%
17	子どものお尻をたたく	保育士養成群	0.8%	17.7%	44.8%	36.7%
		一般大学生群	6.7%	33.6%	30.3%	29.4%
18	毎日、子どもを大きな声で怒鳴る	保育士養成群	0.0%	5.2%	50.4%	44.4%
		一般大学生群	0.0%	15.1%	51.3%	33.6%
19	子どもが歯を痛がっても、歯医者に連れていかない	保育士養成群	0.0%	4.4%	46.8%	48.8%
		一般大学生群	0.0%	2.5%	47.9%	49.6%
20	子どもが泣いていても、無視して抱いたりしない	保育士養成群	0.4%	5.2%	44.0%	50.4%
		一般大学生群	1.7%	19.3%	45.4%	33.6%
21	深夜、子どもを連れて買い物に行く	保育士養成群	0.8%	37.9%	54.0%	7.3%
		一般大学生群	5.9%	50.4%	38.7%	5.0%
22	子どもがいうことを聞かない時は、おもちゃを捨てる	保育士養成群	0.8%	27.0%	55.6%	16.5%
		一般大学生群	4.2%	46.2%	40.3%	9.2%
23	子どもに「ばか、死ね」と言う	保育士養成群	0.0%	0.8%	20.2%	79.0%
		一般大学生群	0.0%	3.4%	22.7%	73.9%

回答者の中に、性的虐待の被害者がいた場合、アンケートに回答することにより、不安定になってしまうことを避けるために、性的虐待に関する事例は殆ど削除した。一方で、躰のための体罰や、生活を支えるため夜間子どもを放置することを容認するのかを問う想定事例文を追加した。親の事情や意図によって、同じ行為でも容認できるのかどうかを明らかにするためである。

倫理的配慮として、調査の結果は統計的処理をするため個人の情報は明らかにしないこと、調査結果は研究目的以外には用いないこと、調査協力は本人の自由意思であることを調査前に説明した。

3. 結果

アンケートを集計した結果を表1に示した。「虐待である」を1.0、「虐待の疑いがある」を2.0、「あまり問題ない」を3.0、「全く問題ない」を4.0として、平均を算出し、両群の平均の差を示した。平均の差の値が大きいほど、両群の認識に差が認められたことを示す。保育士養成群と一般大学生群との間に差異が認められたものと、認められなかったものがあった。どのような想定事例において差異があったのかを検討しながら項目に沿って記述する。

1) 保育士養成群と一般学生群の認識がほぼ一致しているもの

「親がイライラして子どもをたたく」について、「虐待である」、「虐待の疑いがある」と回答した学生は、保育士養成群 99.6%、一般大学生群 98.3%でほぼ差がない。

「あざが残るほど子どもを叩く」も「虐待である」、「虐待の疑いがある」と回答した学生は、保育士養成群 98.4%、一般大学生群 95.8%とほぼ差がない。これらの身体的虐待に関して認識は一致していると考えられる。

また、心理的虐待に関する項目の「あんたなんか産まなきゃよかった」について「虐待である」、「虐待の疑いがある」と回答した学生は、保育士養成群 99.2%、一般大学生群 94.9%でほぼ差がない。同様に「子どもに、ばか、死ねという」も「虐待である」、「虐待の疑いがある」と回答した学生は、保育士養成群 99.2%、一般大学生群 96.6%とほぼ差がない。また「子どもの前で父親が母親に暴力をふるう」は、保育士養成群 99.5%、一般大学生群 95.0%とほぼ差がない。

ネグレクトに関する項目の「子どもが歯を痛がっても、歯医者につれていかない」について保育士養成群 95.6%、一般大学生群 97.5%とほぼ差がない。「子どもを1週間お風呂に入れない」保育士養成群 98.4%、一般大学生群 96.6%とほぼ差がない。

2) 保育士養成群と一般の大学生群で差異があったもの

「子どものためを思ってしつけのためにたたく」は、「問題ない」、「あまり問題ない」と回答した学生は、一般大学生群では47%であり、半数近くがほぼ容認している。それに対して保育士養成群は、「問題ない」、「あまり問題ない」と回答した学生は23.4%であり、一般大学生群と比較すると大きな差がある(図1)。「口で注意してわからなければ、たたいて注意する」も「問題ない」、「あまり問題ない」と回答した学生は、一般大学生群では42.1%、保育士養成群の学生は18.1%であり、「あざが残らない程度に、しつけのためにたたく」もほぼ同様の差異が認められた。「子どもが悪いことをした時に、家の外に閉め出す」については「問題ない」、「あまり問題ない」と回答した学生

3歳女児が皮膚が剥離するほどのやけどを負ったまま放置され死亡した事件では、その前年に、女子が午前0時過ぎに家の外に閉め出され、近隣住民からの110番通報があったにも関わらず、駆け付けた警察官が女子の体に「外傷がなかった」ために、虐待と認識せずに児童相談所へ通告していなかった。ちなみに、先の「子ども虐待対応の手引き」（厚生労働省、2014）によれば、「戸外への閉め出し」は、身体的虐待であると例示されている。また、平成26年5月、厚木市で父親に放置され白骨死体で発見された、死亡当時5歳の男子も、3歳の時に早朝4時、汚れたTシャツと紙おむつだけ身に付けて、裸足で路上を歩いていたので、児相に通告されたが、「外傷がなかった」ために「迷子」として処理された。

「見えない虐待」、「密室の中で加速していく虐待」にも、必ず、サインはある。警察が3歳の子どもが真夜中に戸外への閉め出しをされても虐待と認識しない、児童相談所が早朝4時に3歳の子どもが汚れた身なりで路上を裸足で歩いているのを虐待と認識しない、「外傷がない」という理由で虐待ではないと判断した関係者の虐待の捉え方や認識に問題はなかったのか。虐待の認識があれば、その通告が起点となり、様々な情報が集約され、喫緊のサポートが必要な親子の臨床像が浮かびあがり、虐待死を防ぐことができたのではないだろうか。

確かに、虐待の判断は難しく、児童虐待防止法第2条に虐待の定義はあるが、どのような行動が虐待なのか、明確に定義されているわけでない（山野、2006）（注3）。子ども虐待の捉え方は様々であり、子どもへの虐待で逮捕された保護者の多くが「しつけのつもりだった」と供述していることにも象徴されている。

そこで、これから親になる世代の大学生は、保護者のどのような行動を虐待だと感じているのか、虐待の境界線をどのように認識しているのかを探ることを本稿の目的とする。また保育士を目指す大学生と一般の大学生の虐待に対する意識を比較することにより、虐待の捉え方が所属学科等の属性によって違いがあるかどうか検討し、虐待予防の教育のあり方を模索する参考にしたいと考える。

2. 方法

ビネット調査法（高橋ほか、1996）（注4）を参考に、核家族で暮らしている0歳から6歳までの子どもに対する親の行動に関する短文事例を23項目作成し、①虐待である、②虐待の疑いがある、③あまり問題はない、④全く問題ない、の4択で回答するアンケート調査を実施した。選択肢を4択にしたのは、虐待の境界線の認識を明確にするためである。

アンケート協力者は、保育士養成専攻に在籍している大学生248名（1年生74名、2年生140名、3年生36名）と、一般の大学生119名（理学部2年生46名、人文学部および教育学部1、2年生73名）の合計367名であり、本稿では、それぞれを保育士養成群、一般大学生群とする。学生には直接アンケート用紙を配付し、自記式調査を実施し、その場で回収した。

ビネット調査法とは、短い事例を提示して回答を求め、回答者の考え方を把握解析する調査法である。高橋ほか（1996）の作成した想定事例文を使用すれば、それを使用した先行研究の様々な調査対象者のデータと比較することができるが、高橋ほか（1996）の作成した40の想定事例文では、回答に時間がかかり回答者に負担をかけてしまうので簡略化した。さらに、高橋ほか（1996）の作成した想定事例には、「親が子どもの性器を愛撫する」、「親が18歳未満の子どもと性交する」、「親が子どもにポルノビデオを見せる」といった性的虐待に関する意識を問う事例があったが、万一、

論 文

子ども虐待の境界線を探る

―保育士を目指す大学生と一般大学生のビネット調査による試み―

Boundaries in recognizing child abuse: comparison between students of nursery department and students of other departments by using Vignettes study method

安藤 みゆき

Key words ; 子ども虐待 ビネット調査 虐待の境界線 虐待の予防教育

1. 問題と目的

平成 26 年度に、全国の児童相談所が虐待の相談を受け、指導・措置等の対応をした件数は、88,931 件で過去最高となった（厚生労働省、2015）（注 1）。この数字は、厚生労働省が虐待通告の統計を取り始めた平成 2 年の 1,101 件と比較すると 80 倍を超えている。さらに驚くべきことは、前年の平成 25 年度の 73,765 件と比較しても約 20% も増加していることである。一般的には、虐待の相談件数が増加した背景として、子どもの虐待の認知が高まったこと、核家族化・ひとり親家庭の増加、地域社会の連帯の希薄化や崩壊など、子どもを取り巻く環境が大きく変化していることが挙げられる。それに加え、前年度比 20% 増の要因を、厚生労働省は、相談件数が増加した複数の自治体からの聞き取り調査により、平成 25 年 8 月に改正された「子ども虐待対応の手引き」（厚生労働省、2014）（注 2）の影響を指摘している。

改正された「子ども虐待対応の手引き」では、心理的虐待の例示に、きょうだいに対する虐待行為が追加されている。つまり、きょうだいに対する虐待を目の当たりにした子どもは、直接の被害がなくても心理的虐待の被害を受けたものと捉えるべきとしている。ドメスティックバイオレンス（DV）を目の当たりにした子どもも、直接暴力を受けなくても、心理的に深いダメージを受けるので、心理的虐待を受けているとして対応すべきとしている。

母親が夫から DV を受けている場合の多くは、子どもへの身体的虐待のリスクも非常に高く、DV の被害者である母親が夫の暴力に怯えるあまり、夫と同調して虐待の加害者になってしまうケースが多い。「身体的虐待」、「心理的虐待」、「ネグレクト」、「性的虐待」の中で、相談対応件数が一番増加しているのが「心理的虐待」であり、警察からの通告が大半を占めている。警察が DV を積極的に事件化するようになり、DV の目撃も心理的虐待であるとの認識が普及したことによるものと考えられる。

従来は、児童虐待というと、殴る蹴るのイメージが強く、身体に痣（外傷）が残るほどの暴力を受けることだという認識が強かったが、現在はそのような身体的虐待だけでなく、性的虐待はいうまでもなく、心理的虐待やネグレクトがいかに深刻な傷跡を子どもの心に残すのかが一般的にも知られるようになってきた。

しかし、一方で今でもなお、外傷がなかったために虐待と判断されず、支援に結びつくことなくその後虐待死に至った事例は幾つか散見される。例えば、平成 28 年 1 月に狭山市のマンションで、

執 筆 者（執筆順）

小 野 孝 尚（教授：日本近代文学・近現代詩）

小 林 和 子（教授：日本近代文学）

安 藤 みゆき（准教授：臨床発達心理学）

埴 雅 文（准教授：国語教育）

茨城女子短期大学紀要 第43集

平成 28 年 3 月 25 日 発行©

編集者 茨城女子短期大学紀要委員会

発行者 額 賀 修 一

発 行 茨城女子短期大学
茨城県那珂市東木倉 960-2

印 刷 ワタヒキ印刷(株)
水戸市城東 1-5-21
Tel. 029-221-4381

BULLETIN OF IBARAKI WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

No.43 (2016)

< CONTENTS >

1. **Kosho ONO** ;
A study on Masao Suzuki 1
2. **Kazuko KOBAYASHI** ;
A study on Memoirs of a Doctor of Medicine and NAKAYAMA GISYU
“Teniyan no matuzitu” : Between the truth and literary works 21
3. **Miyuki ANDO** ;
Boundaries in recognizing child abuse:
comparison between students of nursery department and students of
other departments by using Vignettes study method (1)
4. **Masafumi HANAWA** ;
Message to the young generation 2 — Through the disaster volunteer... (11)

PUBLISHED

by

Ibaraki Women's Junior College

IBARAKI